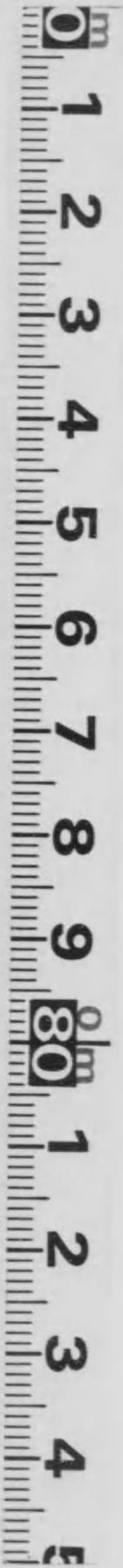


263.3  
176



始





263.3-176



潮思新の育教畫圖

と  
判 批 其

(著助之溶井新)

田 神 京 東

版 藏 館 同 大

大 正  
11. 9. 12  
内 交

263.3-176





## 自序

余は昨年の秋、現地の教育會からの希望によつて、圖畫教育に關する講話を行ふことになつた。そしてその草案の執筆中、不圖自分は次の様なことを考へて居た。

講話が濟んだなら、此の草案の中の一部を骨ともして、更に肉を附け一思想の持ち主として、世の中に出したいものだ、そして折角氣勢を帯びて來た現今の圖畫教育の上に、たとへ九牛の一毛よりも尙薄弱なるにせよ、どうか及ぼす所があるたいものだ。

その講話は、終日美しく晴れて且つ静かな十一月の或る日曜日に或る小學校で行はれた。未だ曾てかゝる場合の經驗を持つて居ない自分には、恐るゝ壇上に立つた。——終に自己が自己との結合の境地を



得ずして、空しく終りを告げた。今更の様に自分の未熟を悔いない譯には行かなかつた。

その後、心には懸つて居たが、校務の多忙さと、繪も描きたいと云ふために、原稿の筆を執ることが荏苒として遅くれるのであつた。

此の書は此の如くして生れるに至つたのである。

今よく／＼生れ兒の姿を眺めるに、親としての自分に貧相な所があり、殊にそれが環境の或る方面からは、一層あり／＼と見え出だされることであるから、我が兒も矢張り貧相ではないかと云ふ疑を持つ。けれど自らを苦しめて、その精神をわけたと云ふことは、その兒に愛を持つ所以であり、愛のある以上、黒子が笑靨に見える所以であつて、親としての又自然の情である。そして一刻も早く我が兒の姿を世の人々に見て貰ひたい氣がしてならぬ。

けれど親が兒のために受ける幸福は、其の兒と世間との關係を豫想して楽しんで居る間にあると考ふべきで、此の上の期待を持つと云ふことは、親が兒を傷け親自ら自身を傷けることのある圈内に踏み込むのではないかといふ氣がする。

大正十一年六月

播州の地にあつて

著者識す



目次

第一章 自由畫教育……………一

山本鼎氏の自由畫教育の要點……………三

第二章 新圖畫教育會の提唱……………八五

第三章 齋藤氏の自由畫教育……………一二三

第四章 岸田氏の圖畫教育觀……………一五二

第五章 結 論……………一八一

附錄 用器畫教育問題に就いて……………一九五

目次

—(目次終)—



群馬縣立師範學校教諭 齊藤始雄著 (七版)

◇自由畫教育論と實際

全

正價金壹圓  
送料金四錢

群馬縣立師範學校教諭 齊藤始雄著 (三版)

◇圖畫教育上の四大改造論

全

正價金壹圓  
送料金四錢

長崎縣立師範學校教諭 岡登貞治著 (新刊)

◇新選圖案集 (單位の卷)

全

貳圓八拾錢  
送料十八錢

(種彩色石版畫上製本)

圖畫教育の新思潮と其批判

新井溶之助著

第一章 自由畫教育

提唱者山本鼎氏は明治三十九年東京美術學校の專科を卒業し、大正元年佛國に留學して各地に遊び、露國を経て大正六年歸朝す。元日本美術院同人、現に本年一月成立せる春陽會の同人である。著書としては、「油畫のスケッチ」「油畫の描き方」「美術家の欠伸」「自由畫教育」等其の他がある。

氏の「出生地は三河の岡崎であるが、育つたのは東京で今も東京に居るが實は長野縣人であつて父は二十年來北信の農村に醫を業としてゐる」と云ふ様なことが、氏の著書の中に述べられてあつたと思つた。





同氏が大正七年十二月歸省して、小縣郡神川小學校に於て「兒童自由畫の奨励」と題して、一場の演説を試みたのが自由畫の發端であつた。大正八年四月二十七日八日の兩日には神川小學校で、最初の自由畫展覽會の催があり、並いで同年九月の秋季皇靈祭の當日には、同縣下伊那郡龍丘小學校で第二回の展覽會が開かれ、大正九年二月には神田裏神保町の兜屋畫堂に於て小展覽會が開催され、同月二十七日には本郷小學校で山本氏の自由畫教育に就いての講演と氏が持參した畫で小展覽會が開かれ。同年四月二日より九日まで赤阪溜池の三會堂にも催され、同月六日には、神田の青年會館で、山本鼎氏片上伸氏その他有志の自由畫教育の講演があつた。その後この種の展覽會は京都市中郡崇山町及び九州福岡等に開催される様になり、漸次諸方に行はれる様になつたのである。

左の論文は同氏が最初「中央公論」大正九年八月號によつて發表し、その他「美術家の欠伸」「自由畫教育」等にも登載してあつたものである。

### 自由畫教育の要點

山本 鼎

普通學に位置する從來の圖畫教育に對して、吾々の行つた是正的提唱は、意外の快速度で諸縣に反響した。

吾々が圖畫教育の合理的な見解を掲げて最初の兒童自由畫展覽會を試みたのは昨年四月の事であるが、今日までに、南北信、東京、丹波、九州、大阪の各地で大小七つの展覽會が催された。それらはすべて吾々兒童自由畫協會員の携つたものであるが、吾々の知らずに居る同じ趣意の展覽會が各地に試みられた事と思ふ。

東京日々新聞社協賛の日本兒童自由畫展覽會と、最近大阪朝日新聞社が主催した世界兒童自由畫展覽會は共に大いなる宣傳力を示した。日々社は勢ひに乗つて是れを定期的に主催する事を決議した、年々春



には小學生を中心とする兒童自由畫展覽會、秋には中學生高女生を中心とする青年？自由畫展覽會を營むで主張の完結するまで續けやうといふのである。又朝日社は、今夏各地の教育會の希望に應じて、近畿をはじめに、山陽、東海、北陸、山陰、四國、九州に亘つて約三十五ヶ所で展覽講演する企を發表した。

此運動は少年雜誌にも現れた。即ち「赤い鳥」「金の船」「少年雜誌」などの自由畫募集がそれである。

私はこれらの威勢のいゝ現象を摘記して、はやくも自由畫運動の戦功を標さうとするのんき者ではない。唯、其處に如何に多くの人が從來の教育に疑ひを有ち、新しい合理的な方針を待ち求めて居るか、といふ事を實證するのであり、更に其實證を提げて、政府及教育界の權威者に、圖畫教育の鮮明なる改革を促すのである。

而して、今此處に私は、國民としての又美術家としての責任感を以て自由畫教育の要點を列記し、其改革の參考に供へやうとして居る。

自由畫といふ標號は、誤解されたり曲解されたりしていけない。或教育家は、自由畫を寫生にも記憶にもよらない樂がきのやうなものと考えて居た。或教育家は「自由畫とは變手古だ、子供は自然的の寫生だらうが臨本の模寫だらうが同様に自由な氣持ちで描いて居るものだ——それなのに模寫だけがなぜ自由畫でないのか？」と反問した。又或先生は、自由畫教育は絶対に生徒を放任するのかと訊いた。「わしははじめ危険思想と關係のあるものではないかと思つて心配しましたよ、展覽會を見てすつかり安心しました、いや有難う、實に子供の無邪氣が現れて居て面白うごわした」と告白した校長さんもあつた。まつた



く都合の悪い言葉である、併し未だにより適當な形容詞を考へつかなく。

自由畫といふ言葉を選びだしたのは、不自由畫の存在に對照しての事である。云ふまでもなく、不自由畫とは、模寫を成績とする畫の事であつて臨本——扮本——師傅等によつて個性的表現が塞がれてしまふ其不自由さを救はうとして案ぜられたものである。

創造 (Création) といふ字が一般に解り易いものならば勿論それが良し、露西亞では自由と云はずに、兒童創造畫展覽會と云つて居るさうだ。——併し、吾が從來の圖畫教育に對する時、自由畫といふ字はむしろ適切ではないか。自由が不自由に代つた時、創造が模寫に代つた時は、じめて自由といふ言葉は勇退すべきであらう。

吾々の提唱する自由畫教育は鮮明に美術教育としての一教課である。だから其教習のものには生徒の創造力が生長し、彼れ等の様々な自然觀が表現され、模擬と虚飾とが必然的に撥無される。

それ故自由畫教育下の成績展覽會は毎に一個の美術展覽會である。其處には模擬の訓練によつて一様に均された所謂整頓が無い代りに、生徒等自身の眼と手によつて選ばれ研かれた個性があり、其智、感、情の自由な流露がある。

從來の教育では、數百人の子供を、いや數千人、數萬人、數十萬人の子供を「國定臨畫帖」と銘打つた安つばい印刷物に導いて居る。

子供らを愛して居る筈の其親や其教師が何故子供らの「創造力」に無



關心なのだらう？。大人が習慣的な傲慢から、平気で作り上げたあのひからびたお手本を尺度にする事をなぜ怖れないのか？。

子供にはお手本を備へて教へてやらなければ畫は描けまい、と思ふのならば、大間違ひだ。吾々を圍ひて居るこの豊富な自然はいつでも色と形と濃淡で彼れ等の眼の前に示されて居るではないか、それが子供等にとつても大人にとつても唯一のお手本なのだ、それ等のものが直覺的に、綜覺的に、或は幻想的に自由に描かるべきである。教師の任務はたゞ生徒らを此自由な創造的活機にまで引き出す事だ。

子供等の創造的種子は、從來の教習では芽の吹きやうもない。美術は種子のうちにはやくも壓しつぶされて居るのである。

左様な教育を美術教育と云へやうか、——美術教育の爲めでなかつたら何の爲めの圖畫教育なのだ。

從來の教育機關は、單に圖畫ばかりでなく、どうやら一切が被教育者の爲に設けられてあるといふよりは、教育者の爲に設けられてあるかのやうだ。

とんと從來の政治が國民のためよりは政治家のために營まれて居るやうに。

從來の圖畫教育の成績には、生き物としての「生徒が現れずに、いやにごたくした教授法」が示されてあるだけだ。



普通學に位置する圖畫教育といふものは、一體何のためにあるのか？  
實に何のためにあるのか？

私は教育家に出會す度に此問を發したけれども鮮明に答へた人は一人もない。

私は勿論躊躇なく答へやうとする。「それは美術教育のためだ。――それでなかつたら普通學に於ける圖畫の教習は無意味だ」と。

處がたいていの人は誤解する。私が畫家であつて美術の事を云ふから、「自由畫教育も結構だが普通學に天才教育は不向きだ」なんてひやかし去らうとする。

美術教育と美術家教育と混同してはいけない。

美術教育が美術學校からはじめて始めらるゝものと考へて居ては困る。

圖畫教育が美術教育のうちの一課目として考へられて居なかつたら間違ひだ。

音樂の教習が音樂家を、理科の教授が理學士を作らうとするのではないやうに、圖畫の教習が美術家を作るのを目的として居ない事も當然だ。だが、其使命が美術教育で無いとしたら、一體何だ――假りに圖畫の教習に何か他の使命があるとして、然らば、子供等の美的感銘を何とする。創造的能力を何とする。人類最高の裝飾とせらるゝ藝術の味解を何とする。人間の享有する性能の最も著しいものであり、其社會



生活に生涯を通じて重要な意義をなすそれ等のもの、開發涵養の役目を、普通學の何處で受持たうといふのだ。美術教育の組織は普通學にあつてはならぬものだ。

科學者は豊富な知識を注文するがいゝ。軍人は逞しい體力と正しい勇氣とを望むがいゝ。私は其上に、彼れ等自身の自然觀も趣味も有つた創造的情熱ある人間らしい中學生を送り出してもらひ度いのである。

驚いたのは、地位ある一教育家が、

何故美術教育が必要なんです!!

「美術教育が人生にどういふ價值があるとお仰るのです!!」

と質問した事である。私はまごついちまつて、「貴君の質問を真似

すると、何故德育が必要なんです!! 道德が人世にどういふ價值があるのです!! なんと云へる事になつちまいますよ!」とでも答へるのを、氣がつかずにしまつた。

衣裳に化粧に宴會に家具文房具、室内店前の裝飾に、建築、市街、公園、演劇、お祭、展覽會に數へきれない程の美術的效果が、吾々の社會に普く表現されてあるを見ながら、それ等のものを鑑賞享樂し、批評獎勵し創造顯耀する素因たる美術教育の必要を今更疑ふやうな教育家では千萬卷の書によつて理由を講釋しても追つつくまい。

線かへしいふが、美術教育でなかつたら何のための圖書教習だ。

それは物體を正確に寫し能ふやうにする教習で、大人になつてから



必要に應じて物の形の描けるやうに準備するのだ、——といふか。卿等の信ずる正確とは、人間の眼に映じた對象の姿ではなくして、生徒の實感を無視した、冷たい教授法で抽象された模形だ。

卿等は常に生徒をして物體の模形を作らしめ、又物件を標本的精緻に描寫せしめて圖畫教育の要點を盡したやうに思つて居る。

處が僕を以て見れば、それ等の模形と精緻とは圖畫教育の應用的一小部目であつて、むしろそれは理科や植物學の補助畫學と思ひ度いのだ。一體さうした抽象的正確の造形力や、標本的精緻の描寫力の大人になつてから何時必要なのだ。植物學者や器械工になつた者でそれを必要としたら、其時期に少し習へばすぐ出来る事だ。それこそ却つて、普通學に課するに不適當な、専門的な畫學である。

圖畫教育の使命は要するに鑑賞教育である、——といふか。卿等の云ふ鑑賞とは、例へば土佐派と狩野派の別を知り、帝展風と二科風の相異を會得する類であり、以て生徒が大人になつた時期に、觀畫上に分別を備へた人物たらしむるを目的とするものゝやうに聞いて居るが、此教育は小學の過程には勿論有害である。中學の過程でも單にそれは美術史的に説明するだけで澤山だ。其技工的若しくは審美的の解釋の如きは既に美術家教育の領分に屬せらるべきものである。

鑑賞教育の主張者は美術教育を是認する人であらうから定めし、生徒等の創造的生長を主義として、彼れ等各自が人為的拘束なき印象、感覺、認識空想に従つて自づから畫因をつかみ、技工を自得する自由、畫を獎勵して居るであらうが、萬一さうでなかつたら災ひである。何となれば、創造力の無い處——個性的感銘と其表現的習性の無い處に、順當な



鑑賞は有り得ないではないか。此断定に反對する人があるならば、其人は物知りと鑑賞とを同じ事と思つて居る人だ。

圖畫教育は、つまり美的情操の教育である、感情を豊かにし、趣味を高尚にせしむるための教育機關である、——といふか、勿論私は不賛成しない。併し左様な見解を有つた人々が何故、生徒らの自然觀を閑却し、創造的能力を無視して居るか。常に範を以て臨み、概念を以て制し、權威を以て規定する從來の畫學に、不合理を感じなかつたといふのは變である。

眞似する事を知つて産む事知らない者、概念蔓つて實感の萎縮した者、美術を知つて美を知らない者どもに、なんで美しい情操も高い趣味もあり得やう。

而も從來の圖畫の教育からは、さやうな昧者が民衆のなかへ送られ、さやうな墮落者が美術家のなかへ送られねばならぬのであつた。

又繰返していふ、圖畫教育は何のためにあるかと。

卿等はよく實用々々といふ。併し美術的效果を生命とするあらゆる裝飾、あらゆる手藝、あらゆる創作を外にして、圖畫教育の實用に就いていくばくの物例を挙げ得るか？

實は不幸にして從來の圖畫教育は頗る不實用的に計畫されて居るのである。

美術教育は要するに感情教育だといふのはまあいい。併し其處に智育はないと思ふのは亂暴だ。ありていに言詮すれば、人間の有つて



居るあらゆる性能に、滋雨を灌溉するのが美術教育だ。なぜならば、子供が一枚の寫生畫を作るに當つて、彼れの智慧も智識も經驗も、印象も感覺も認識も、齊しく働かざるを得ないではないか——で其渾一な表現が即ち創造なんだ。

美術教育とは、愛を以て創造を處理する教育である。

私は、透視畫法なども、普通學から除けとは云はない、併し美術教育としての教目へは入れまいとする。若し透視法が美術上に冒すべからざる法則であつたならば、さしづめ、一畫面に二つも三つも地平線のある東洋の名畫などは悉く失格せねばならなくなる。

透視法は美術的價値などとは大した關係の無い單純な法則だ。畫學よりも數學の親類なんだ。

又々云ふ、圖畫教育は何のためにあるか、と。

それを明確にする事が何よりも急務だ。もしそれが美術教育を意味するものでないときまつたら、私は知らない。

美術教育である、となつたら、私は熱誠をこめて自由畫教育を主張する。文部省と、教育界の權威ある人々の手に、統一ある美術教育が組織されて、自由畫教育が普通な事となる日の一日も速かに來らん事を熱望する。

普通學務局長の言に由ると、文部省では目下圖畫教育の一大改革を企て、居るさうだ。處が、その改革たるや残念にも模寫教習絶廢の企てではなくして、臨本改良の計畫なのである。



全國數百萬の兒童の、チャイミングな創造力が、其改良されたお手本で此後更に幾年の間蓋をされる事か。

良い機會が今實に無駄にならうとして居るのだ。

私は焦慮した、熱意をこめて局長に、臨本絶廢と、自由畫教育斷行を望むだ、……ひろんの事局長は豫定の計劃を遂行するに違ひない——今の世の中はあんまり用が多すぎるから。

恃む處は教場のパトロンだ。吾々は威勢よく氣長に、彼れ等の間に此信念を植ゑつけてゆくであらう。吾が自由畫の提唱は普通學中で最も巾の利かない、畫學にひけられて居るが、自由畫の精神は純粹なる道德を意味するものだ。だから吾々の意氣は知らず知らず折伏的に

なる。

「あなたの自由畫の主張は要するに、臨本を廢せ——たつたそれだけの事なんですか」と肩で嗤つて見せた教育家があつたが、まつたくそれつきりの事なんだ。

子供等にあれ程なチャイミングな自然觀があるのに、あれ程な自由活達な表現力があるのに、身の程を知らない大人共が貧相なお手本を作つて子供の能力に堅い蓋をして平氣で居るのを眺めて公憤を起したのだ。而もさやうな不道德が國定の方針となつて普遍的に行はれ、それを怪しむ聲も聽えないのは何といふ事かと憤慨したにすぎないのである。

私は學課の組織に就ても、教育界の情實に就ても、全く無知だ。でも



それをひろん心細いと思はない。

私は行はれさうな事を唱へて居るのではなくて、行はねばならぬ事を叫んで居るのだ。

吾々洋畫家の歴史では、臨本や師傳の束縛を排して、個性を以て自然の眞を洞察描寫する藝術的革命が十八世紀の末に既に遂げられて居る。

曾て、聖者の奇蹟や國王の治蹟などを顯揚讚美するために磨かれた表現上の技能が、今度は、各人——即ち畫家其人の自然觀なり詩觀なり又空想なりを表現するために練られるやうになつたのであつて、従つて彼れ等の身邊觸目の現實が畫因となり、合理的な構圖、眼に親むだ形、物質の種々相、空氣、光線等の實感が驚く可き自由さに於て開拓された。

而も初期印象派プレエリムプレシヨニストは、色や調子に於てこそ個性的になつたが、形の認識については舊弊であつたと云へる。

全體昔から、色は主觀的なものとせられたのに反して、形には客觀性が信じられて居た。有名な繪畫史にも、形の描寫はレンブランドで絶頂に達してしまつた。といふやうな事が言はれて居る。

處が、それが後期印象派ポストプレシヨニストの人々達によつて卒直に破られたといふものだ。

其處では、合理的に純粹に、形も色もすべて個性によつて表現された。奇異とすべきは、さやうに表現の純が重んぜらるゝ時代に、所謂日本畫の盛んなる存在である。美の感銘を常に先輩の作物の上に受けて、それを種として更に己れの美術を匠むといふ、創造の變態が連綿として榮えゆく事である。



子供は臨本に、大人は扮本や師傳に、表現の純を濁されて居るを怪しみもしない世間に、良い美術も美術工藝も現れやうわけがない。

トルストイは「児童について人の道を學べ、児童は未だけがされず―彼れ等にとりては人々皆同じ」と云つたが、私は児童等の鮮やかな創造力に驚く者だ。日々社の展覽會の時に、石井鶴三君は感嘆してこう云つた「……子供はみんな天才なんだ」と。

前にも云つたやうに、自由畫教育は、愛を以て創造を處理する教育だ。従來のやうな押し込む教育でなくて引き出す教育だ。

だから自由畫教育に教師たる資格は、美術界の知識に富んで居る事でも、水彩畫が描ける事でもない。唯生徒等の創造を愛する心―それ

があればよいのである。

自由畫教育の要點はすてきに簡潔だ。たゞ一句で盡せる、曰く「模寫を成績としないで創造を成績とする」。

大人によつて技工化された抽象的な實相リアリティを手本として眞似イミテーションを習練させるやうな事を、まづすつぱり止めにして、子供らの性能を自然の沃野に放牧し、其處で自由に産ませやうといふのだ。

權威を以て範を垂れず、愛を以て導き、子供らの能力を順路に生長せしめやうといふのだ。

美術よりは美、模造するよりは創造、夢想よりは感銘、過去よりは現在



に立脚する此思想は、ひろん子供にも大人にも奨めねばならぬ。

されば自由畫教育の適用は、中學生にも、高女生にも、大學生にも、美術學校生徒にも美術家にも齊しく要求せざるを得ない。

彼れ等はすべて、表現の純を知らねばならぬ。誰れ人にも植えつけられてある「創造」の苗が、愛し愛さつれつゝ生長する事を正しい道德とせねばならぬ。

子供らから創造の契機を奪つて模造の習練を強要する不正な畫學から救はれねばならぬ。

教師が教室で生徒らに「孝」を説く——それが効果を擧げる所以は、それより先に生徒らの心に父母に對する愛が植えつけられてあるからだ。

同じ事に、自然美の感銘が蓄へられてなかつたら、美術は正當に了解せられない。

兒童らが體が鳥で顔が人の畫を描いたり、首からぢかに手脚のついた肖像を描いたり、太陽を畫面の一番手前から現したり、紙一つばいの大きな富士山の下へ豆のやうな人を散らしたり、魚と間違へさうな馬や、倒れさうな家屋などを描いたりするのをつかまへて、「兒童が斯やうな不完全な間違つたものを描いて居ても、放つて置いていいのか」と質問する先生がかなりあるが、さうした非科學的な不完全を追窮した日には、大人の畫も多分全部落第だ。さしづめ國定臨畫帳が槍玉にあげられねばなるまい。



子供達は、お父さんと先生を一番偉い人と思つて居る。それを困つた兒だと思ふ者はないだらう。間違つた考である——ほんとうの價値を説明してやらねばならぬ、と氣をもむ人はあるまい。

それは實に子供らしい愛すべき信念なんだ、それと同じやうに子供には子供らしい愛すべき直覺があり、綜覺があり、自然觀があるのだ。

昨年秋頃の事であるが、米國の高官が、可愛い男の兒を伴つて日本へ來た。二人が米國を出る時から續いた晴天が横濱へ着く二三日前から陰鬱な雨天に變つて太陽の顔が一寸も現れなかつた。そこで其男の兒が、お父さんの顔を見上げて訊くには、「お父さん!! 太陽はどうして米國へかへつちまつたの?」と、お父さんはやには兒を抱きあげて接吻した。それを眺めた時事新聞の記者が嬉しさうにそれを夕刊

に報告した。それを讀むだ私が又顔をくずしてよろこんだ事だ。

處で、此兒のさやうな正直な、チャイミングな自然觀を、慌しく訂正しようとする馬鹿者はあるまいではないか。

かういふと、「訂正する事が何も無いとすると、教師は無用になりますな」と不快な顔をする先生がある。

まるで、叱る事件が無いと心細がる巡査のやうだ。

ほんとの事を云ふなら、子供を訂正する必要はなくても、先生と其教授法とは充分訂正しなければならぬのである。

自由畫教育の要領は簡單でも、學校での其處理法の完成は容易でなく。緻密に徹底した教師用書を作成する事が當面の問題になる。吾



が協會でも、普く、教場のパトロンから材料を蒐めてそれを研究整理して其書を編述する事を企てゝは居るが、むしろ斯やうな事業は了解ある大いなる教育機關によつて遂行せらるゝ事を望まざるを得ないのだ。

何となれば、吾々は微力であるし、製作生活のためのエネルギーが、他に掠奪される事にかなり恐慌を感じて居るからである。

私は熱誠な教育家諸君から、自由畫教育の教場での處理法に就て質問を受ける毎に、未だ充分精密に答へる事の出来ないのを遺憾とするが、實は夫れ等の場合々々に應ずる處理は其衝に當る教育家自身に研究してもらい度いのである。私は正しい原則を指示したつもりだ。これを有機的に施行する任務は教場のパトロンたる人々の上にある

のだと考へて居たい。

生き物が生き物を處理する處に理論の刻明な表現は期し難い。教師の人格なり趣味なりが知らずくゝの間に生徒らの創造力に紛れ入る事は防ぐ必要のない事だし、防ぐ事も出来ない事だ。

例へば、南信濃の龍丘小學校は、私の知る範圍では最も熱心に自由畫教育を行つて居る學校であるが、其處の教師は色彩を愛する人と見えて生徒等に、一樣に良い蠟鉛筆が供給された、——そこで生徒等は悉く色彩家になつてしまつた。

彼等は初めは、與へられた色鉛筆の綠で綠葉を描いて居た。處が間もなく、持つて居るだけの鉛筆の彩で描き混せて、彼等の眼に認識した綠葉の色を現す事に進むで來た。——これをいけない事とは云へないではないか。



私は私の方針で、一人のお嬢さんに畫を教へて居るが、其お嬢さんはいきなり油畫をやり度があるので、私は油畫の具を購ふ世話をしてあげた。そして『好きなものを書いて御覽なさい』と云つたきりで知らん顔をして居た。

お嬢さんは困つたあげく、食卓の上にある湯のみを描きはじめた。處が忽ち筆を置いて、

『湯呑が圓く浮き出して見えて居るのをどうしたら描けるのでせう』

と、ぢれ出した。私は笑ひながら、

『圓く浮き出して見えますか、そいつは結構では何故圓く見えるのかを考へて御覽んなさい、ほら、明るい面と暗い面がぼけるやうに連続し

て居るでせう。あれですよあなたに圓く浮き出て見えるのは、——あの濃淡を描いて御覽んなさい。』

と教へた、お嬢さんは、顔を紅らめて又描き出したが、間もなく、

『あの濃淡を、明るい處や暗い處を、一體どんな色で描いたらいいのでせう。』

と、すねくりはじめた。

『困つたお嬢さん!! あなたは三越で反物を買ふ時に、なか／＼色合がやかましいさうじやありませんか、其時の眼を働かして御覽んなさい。そら、蔭の部分は大體薄い紫紺色でせう。そして其の端の方は食卓の赭い板の反射でほんのり紅がさして居ますね。日向の方は障子の外の青空が映つて青味を含んで居ますよ。だから、青が見えたら青、黄味を感じたら黄味、紅が見えたら紅を、見えるやうな濃さにつけておいて



なさい。もし又其の濃淡を黒と白とに感じたら黒と白とで描くんです。しつかりおやりなさい」と教へた。

此「ナチールモルト」は三時間ばかりして、とう／＼出来上つた。ちやんと丸味を備へた存在せる湯呑が立派に表現された。

お嬢さんはこれに味を得て、お母さんとの温泉ゆきにも畫の具箱を携へて出かけたが、

「先生、美しい／＼青空を、どんな彩で描いたらいいんでせう。前の山には胡桃の稚木が繁つて、朝日をうけてむく／＼と見えて居ます。又お池の水は澄むで底の小砂利までも見えるんです、其上を又澤山な鯉が泳いで居ます。先生ほんとに、どう描たらよいのでせう。」

と手紙で訴えて来た。私は、

「まだそんな事を云つて居るんですか。見えた通りに御描きなさい。」

もし私が、空はコバルトでお描きなさいと申してあなたが其通りになすつたら、あなたはコバルトを塗つた役目をしただけで、美しい／＼空を感じた人でも描いた人でもなくなるじやありませんか。」と返事したのであつた。

兒童には氣まゝに描かせるがいい、彼れが表現に關して質問をはじめたら、技工化した範を示さずに、技工を發見する事を教へてやる。

彼れが中學の過程に進むで、認識の複雑と知識慾の爲に、描寫があつてくうになり出したのを見たら、勿論強いて畫學をやらせなくともよい、其時期には描寫は從にして、知識的な美術教育を主として施すべきだ。何故ならば、普通學には美術家教育を要さないからである。

兒童の自由畫教育は、要するに美術教育の一科であつて、つまり手輕



に云へば、小學時代から自然科学に關する知識が準備されて科學上の簡単な常識が具備されるやうに、小學時代から美術教育が施されて美術上の常識が具備されるのを至當とするのである。

要するに、私の自由畫教育の主張は、鮮明であると共に簡單だ。

五本の指が五本ながらに釣合の取れた形態かたちで育つて居ねばあかしくないやうに。人類の生活に其の一本の指を意義する美術上の教育が普通學のうちに培はれなければうそだといふ事と、現に普通學に編み込まれてある圖畫科なるものが、もしも美術教育のためでなかつたら不必要であり、美術教育の爲であつたら躊躇なく自由畫教育を行ふべしといふのである。

そして、模寫を排し創造を奨める、といふ事が其處理法の心棒となる。

(完) (九年七月六日)

次の論文は同氏の著「自由畫教育」の中に「自由畫教育の使命」と題して登載してあつたものゝ中から同論文が餘り高い故、考察の資料ともなるべき箇所について摘出したものである。この論文は又中央公論の昨年十月號に「美術教育」と題して載つてゐる。彼れと是れと極僅かな差があるのみである。

「自由畫教育の要點」といふ一文を中央公論誌上に發表してから、丁度一週年になる、一週年の此頃になつて、此の説も漸く全國の教育會に眞面目な問題として取扱はれ來り、どうやら消し難い火とはなつたが、而もなほ、八十何パーセントは舊式體操をやめないし、文部省は例の傳統的な態度で新舊折衷の策に據り、目下再び新畫手本の編成を急いで居るといふし、各縣に圖畫教育研究會が催され、自由畫教育を挾んで右黨左黨對峙し珍らしい活氣を見せては居ても、簡明な道



理をいやに七面倒に討議するばかりで、結局新定畫帖は是を適宜活用する事とし、専ら寫生畫を奨励する事といつた處へ納りをつけ、私の主張が美術教育を志すものであり、又哲理に根底するものである事などには考へ及んで居ないかのやうであるし、寧ろ一と度、それが美術教育であると聽くと、斷乎として不服を聲明し、もしくは困つた顔をする教育家が殆ど九十何パーセントでもあらうかと考へれば、ものを言ふのもいやになつてしまふのであるが、併し、一度でも云ふ必要のあつた事なら、千萬度と雖も繰り返さねばなるまいと思ふので、此處に又々其の後の所感を述べる事にした。

二十年の美術家生活のうちに興へられた悟性(中略)私をして、お手本といふ仲介者を用ひて自然を學ばしむる事を止せ、形態、色彩、調子、構

成のすべてを直接に自然に就いて學ばしめよと云はしたのである。終に見る事の不<sup>い</sup>びを知らぬ人々を氣の毒に思ふのである。美術家と素人との差を見るといふ事の差である、と斷案した人もあるが、私は素人と専門家との差を描くといふ差だけに認められる時代が來るといふと思つて居る。見える事だけは父にも母にも妻にも兄弟にも友人にも赤の他人にも見えてもらい度いのだ。處が現在には専門家でも見えないで描いて居る人が澤山居るのだから心細い。圖畫教育界の如きは、見せない教育を容易に捨てようと思はないのだから心細い。

趣味教育ともつかず、職業教育ともつかず、變に理窟ッぽい教育論から混成された啓蒙教育なのである。即ち文部省の示した教授要



目には、

「寫生畫ヲ授クルニハ成ルベク先ヅ教員自ラ模範畫ヲ示シテ其布置描法ヲ説明スベシ」とか、

「畫題ハ成ルベク他ノ學科目ト教授上ノ連絡ヲ圖リ、應用ノ廣キモノ又ハ生徒ノ趣味ヲ養フニ足ルモノヲ選ビ其ノ高尚ニ過グルモノ或ハ鄙陋ニ涉ルモノハ之ヲ避クベシ」

などと訓令してあり、更に、新定畫帖にはさまざまの約束が示範れて居て、生徒等に智慧や、技巧の自由な發露を思ふさま邪魔して居るのである。處が、左様な訓言と左様な手本とで、正確だの美だのといふ事を示範しようとしたのだから呆れざるを得ない。啓蒙教育はまさに彼れらにこそ必要であつた。彼れらの教科書には至る處に實用實用と書いてある、併し、彼れらの裝飾學、造形學から何

の實用が獎められたか？

圖畫教育の實用とは、つまり造形的物件の美的價値に關する事であらうが、彼れらの畫學からそれが少しでも豊富になつたであらうか、小中學は勿論の事、師範學校まで其の教授要目に大さう立入つた教授法や處理法の課業はあつても、美とか美術とかに關する何等の學課もなく、裝飾造形の智慧や技能を統整する一つの理性——即ち藝術觀といふものが涵養される事なくしてなんで畫學が實用となり、建築や、服裝や、家具などで漸次に良くされて行くやうな結構な事があり得ようか。彼れらも遠慮がちに其事を云つて居る、兼て美感を養成するにありと。併し要するに兼てあつて大事なものではなかつた。私に云はせると此處に本末顛倒があり、ために從來の畫學は智慧をも技能をも活き／＼と生長せしむる事が出來ずに、其



の學科は教育上に無駄事の如く扱はれるやうになつてしまつたのである。

彼れ等が最も重んじたのは實用といふ事であつたが、其教育は、物體を圖學的に認識せしむる事であつた。彼れ等の一人は斷言して居る「すべて實用といふ事は所謂圖學的に畫かなければならないのである」と。又文部省も、小學校中學校に向つて、

「圖畫ハ通常ノ形體ヲ看取シ正シク之ヲ畫クノ能ヲ得シメ」と云ひ  
 「圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且ツ自由ニ之ヲ描クノ能ヲ得シメ意匠ヲ練リ」

云々と訓示して居る。處で、其通常の形體といふのは人間の眼からの直接、感覺とか、印象とか、認識とかいふものをまゐるで無視した、冷たい教授法で抽象され概念化された模型なんだ、又、物體を精密に觀

察しといふのは、例へば薔薇の花に就いて云へば、花びらの枚數も、葉のまはりのきざ／＼も、枝のとげの數も、實物通りの數と位置とに描かせようとする事で、求むる處はつまり標本的精緻なのである。彼れらは、姿ポーズに就ても、色價カラーに就ても、調子トーンに就てもまゐるで無關心だ。物體の奥深い價值を悟らしむる立體觀、色價カラーの限りない智慧となる物質美、総合的な美を形づくる環境の詩趣、さては時の現象、空氣、光線の美しさなどにもとんと冷淡だ。——彼れらの教育には有機的な要素がすべて省かれて居るのである。

彼れらは、机や茶碗や、花や、建築などを所謂圖學的に觀、且つ描かしめる教育を以て、實用に奉仕するものと思つて居るが、さやうな教育は指物屋の小僧とか、標本繪師なんかに必要なでもあらうが、普通學に



は不向きだ。普通學には、机なり茶碗なり花なり建築なりの美に對する學問を興へなければなるまい。どういふ机や茶碗が美しいのか、なぜ美しく見えるのか、といふ事を識らせる學問の種をあるして育て、ゆかねばなるまい。それには四五人が啓蒙のつもりで案出したそくばくの模型を興へて、貧弱極る形の學問をさせるやうな事を止めにして、誰の身邊にも隨所に溢れて居る立派な自然の材料に就て、美のすべての要素を知らしむべきである。チョークに分解されない前の渾一體に直接して、觀させ、描かせ、又語り聽かせる事によつて、生徒らが本具の智慧を無碍に流露せしめ、闊達に生長せしむる事にこそ教育の旨味を解すべきである。

從來の圖畫教育は、全く見る事、のよるこびに導かなかつた、智慧の

自由も技巧の自由も妨げて、子供のうちに早く既に裝飾の本能を萎縮さしてしまつた。美の道德から評すれば實に背理な事であつた。

唯私の不服なのは、今日の環境にあつて、なほさやうな美の教養に關する一つの背理が横行し、而もそれが政府の權威に依て支持され、官立學校に依て保證され、美術家も一般父兄もとんと知らん顔をして居る事である。

全く、自由といふ文字は哲學的な味ひが深いだけに、何時までも誤解され易い、それが教育といふ字に結びつくといふよく變な感じがすると見える。本當に二つ共存中合せに悪い因習を有つて居るので、自由畫教育といふ標語は、年老た教育家を迷はせ、又憤らせたので



ある。併し、トルストイも教育論で斷言して居るやうに、教育學の唯一の軌範は自由であり、唯一の方法は實驗である」と云ふのは眞理である。此頃、自由畫とは絶對無干涉の放任教育であるか？、然らば自由畫は教育上の邪道であると憤激した人や、人生に絶對の自由と云ふものはない、それは單に空漠の觀念にすぎないなどと冷笑した人があつたが、——馬鹿な話で、自由の觀念は却つて萬人普遍のものであり、それを順當に生長せしむる事に反對の理由は無さうなものだが、意外にさうではないのは、つまり自由を絶對なものとする考へる誤りから來るのであらう。自由はいつも相對的なものだ、長い人類の歴史に、さまざまの不自由を喰つて今日のやうに肥え太つて來たものである。——私は想ふ、日本の歴史の上でも色々なドラマを演じて來た、此怖るべき頼る可き彈力を有つた理性、を愈々立派なものに

仕上げる事こそ教育の使命ではないかと。

吾々の自由教育とは、教師の自由勝手に教育する自由教育では勿論無く、自由、其事を教育する自由教育なのである。從來、教育と云へば、自由を制限したり、壓迫したりする事で、人間を良くするには、自由に足枷手枷をしなければならぬやうに考へられては居なかつたか？。私の信ずる處では、自由を拘束したのでは人間の本質は決して良くならない、少くとも自由を知らない者に生長はない。即ち各人の自由、其のものを豊かにしやうとするのが吾々の教育觀なのである。喩へば、スペイン風を防ぐにマスクを以てせず、強健な體力を以てせしめようと圖るのであり、不幸な性慾的失足を防ぐに男女の交際を禁ずる事を以てせず、に交際の自由に基く兩者の理解によ



らうとするが如きである。

自由の相對が奴隸制度であつた時代よりそれが徒弟週休問題になつてゐる今日の方が自由は肥えて居る。又、自由の相對が、家風といふ因習であり姑のいぢわる根性であつたりした時代よりは、それが夫の趣味などに相關する近頃の方が自由は肥えて居る。又、自由の相對が賃銀問題であつた時代よりそれが仕事の質の問題である時代が來たら自由はより肥えるのだ。

蓋し、自由畫と云ふ文字は私も好きではない、それに就ては昨年から云つた事である。

「自由畫といふ言葉を選んだのは不自由畫の存在に對照しての事

である。云ふまでもなく不自由畫とは、模寫を成績とする畫の事であつて、臨本——扮本——師傳等に依て、個性的表現が塞がれてしまふ其不自由さを、救はうとして案ぜられたものである。——自由が不自由に代つた時創造が模寫に代つた時は、始めて自由といふ言葉は勇退すべきであらうと。

私の自由畫教育説は、圖畫教育の使命を明かに藝術教育(美術といふも同じ)と認る處から發生した。それ故觀察、鑑賞、創作、描寫一切の生長を各人の智慧と技工の自由に基かしめ、彼れらの生涯を一貫する發達を希ひ願つたのである。其美を知り、其美術を知り、其趣味の深淵を會得する事を勧めたのである。私の理論の略圖は斯うである。

智慧……………自由  
製作……………自由  
技巧……………自由



圖畫教育	審美學的考察……………自由	—藝術教育
鑑賞	美術史的考察……………自由	

「自由畫説は良いやうだ、併し藝術教育なら反對だ」と或縣の視學が研究會の終りの日に挨拶したさうであるが、して見ると此人は自由畫教育の何に賛同したのであらうか？、私は、藝術教育説はいゝやうだ、併し自由畫説は反對だといふ言葉をこそ待ち設けて居るんだ、何故ならば其處でやつと圖畫教育なるものが、哲學や藝術觀で鍛へられるからである。それにしても藝術教育の他に圖畫教育の使命があるとするればそれは一體何だらう？。

子供らが楽しみながら描く、——描く事によつて、自然の活きくした立派な種々相、姿や、形や、彩や、調子の交響樂に親みを重ねる、——其

親みのうちに美の觀念が培はれ、美術に對する愛を知り、其要領を會得し、やがて常住に觀る事、のよる、こびを有つた潤ひある生活が恵まれる。そして彼れらの環境に充滿するあらゆる造形的物件、文房具とか什器とか、家具とか、書籍とか、着物とか、建築とか、市街とか、公園とか、身振りとか、顔とか、畫とか、劇とか云つたものゝ美術的價値を鑑賞し批評し、享樂する、——さうした藝術的涵養と功利を別にして何か他に圖畫教育の意味があるとすればそれは一體なんだらう？。

物理、數學、國語、音樂、倫理、それらすべての文化價値をなす學問は、小學生と専門家を貫く一線の眞理の上に置かれてある。小學生の理科と専門家の理科とは全々別のものである。ではない筈だ、たゞ深淺廣狹の差があるにすぎない。獨り圖畫教育が何故、美術家の信念する所と軌を異にされねばならないのか、圖畫教育が美術教育でなかつたら、何



處に美術教育がある、あくまで藝術教育を欲さないとすれば、人類全體が具有する裝飾の智慧の捨て場所を考へてもらはねばならぬ。

お手本から解放されると、大抵の子供は、彼等のリアールの上に、感覺も認識も技巧も驚く可き發育を見せるものだ。

「お手本を臨畫する事も模寫なら、自然を寫生する事も又模寫である」といふ人がたま／＼あるが、それは大違ひだ。何故ならば、モチーフを「自然に得て、作つたものは、他人のリアールではなくて、其人のリアールであり、他人が美と感じたものゝリプロダクションではなくて、彼れが美と感じた其物だからである。

「子供に臨本を與へれば、唯眞似をする。何故ならお手本と云ふものは、皆技巧的に節約されて居るから其の線や筆致を追従するより路はないからである。——したが、一體現在あるやうな、又あり得るやうな描いたお手本に一體美があらうか。——美はお手本のために作つた畫には無い筈である。」

小中學に美術教育の無いのは間違つて居る、圖畫手工教育がそれに當るならば、其目的觀、方針、處理法等が、藝術論に依て解決されずに居るのは間違つて居る。

文部省に要求したい事は、小中學に於ける美術教育の設定だ。美術教育といふよりも、作文、音樂をも包攝する藝術教育の編成だ。凡



そ、造形的物件には、二つの價值がある、一つは美術的價值、一つは經濟的價值だ。云ふまでもなく美術的價值とは、形態、權衡、面、色價等で表現された綜合的もしくは部分的な美の價值であり、經濟的價值とは、堅牢、便宜、廉價等を意味する實用上の價值である、處で、小中學では何れの價值に關する學問を與ふべきかと問はれてそれは堅牢、便宜、廉價に關する理解を授くべきであると答へる者は、まさか無からう。それは職業教育の一科目であつて、一般ノ知らねばならぬ知識ではない、一般人が知らなければならぬのは、吾々の社會生活に驚く可く多種目饒多になつて居る造形的物件の、味ひに就いての學問であつて、それは藝術家、藝術、藝術心の立場から、理解され、價量する可きものである。藝術は藝術家に求むべきであらう、併し藝術心は、私は是れを同胞の全體に求めやうとする。何となれば、藝術心とは、人類

本具の智慧であつて、それこそ人間のあらゆる生活に脈絡する靈活なるエネルギーであると信ずるからである。私は其のエネルギーに就て曾つてかういつた。

「藝術心は、美しい指輪も作るし、tableauも作るが、同じ心で建築をも市街をも、國家をも時代をも、更に人類全體をも立派なものにしやうと企てる。其本來の性質は、潔癖な分裂を圖ると共に、時あつて力の雄大な綜合を示顯する——藝術心を恃まない他の分裂と綜合とは、毎に慘憺たる犠牲者をいださねばあかない、而も、慘雨の過ぎ去つた跡の世に、何ものも遺らない。まことに、私は吾が國の現状が、藝術心に對する一般的な教養をまるで無視して居る事を痛嘆せずには居られない。」



自由畫教育は矢張りリズムに建つて居る。繪畫史上のリズムでなく、只各々の眼で見よ、各々の靈たましひで觀よ、各々の趣味で統べよ、といふ哲學的なりリズムだ、それだから、私は先づ第一番に、お手本を否定し、モチイブを無際限に廣くしたものである。モチイブまでも兒童に勝手に選ばせるといふ事は示範教育に慣れた教師にとつて最も不服な點であつた。彼等はそれでは大人の老婆心の使ひ道がなくなると云つて險こわしい顔かほを見せた。處がモチイブの擺みぶりに先づ其人の價値が量られるものだ。人文の推移は、觀念の變遷よりも、モチイブの變化を最も鮮かに語つて居る。

(以上)

一

先づ自由と云ふことに就いて考へて見たいと思ふ、二三諸家の意

見を參考にして見やう。

▲荒木十畝氏 (日本畫家前東京女子師範教授、帝展審査委員)

子弟に對して私は何時も「不自由の極が自由」と云ふ事を云つてゐる。「有法の極に法無し」とも云へる。美術家は自由であらねばならぬと云ふ事は、よく聞く事だが私は感心しない、束縛は自由の第一歩である。近頃或る一部には未だ繪を初めて問の無い人で字義通りの自由だと云ふ繪を畫く人々がある、それ等の繪を持囃するのは世の中が悪いのだと思ふ。本當に自由の域に達するには五六十歳にならなければいけないと思ふ。

(中央美術昨年二月號同氏の發表せる記事の一節)

▲岸田劉生氏



一體、自由と云ふことに捉はれ過ぎるのが藝術のみならず、今日一般の弊である。因習に捉はれ切つた時代への反抗として仕方はないが、反抗は、要するに反抗であつても、もう一つ先のものが必要なための前提に過ぎない。自由といふ事に捉はれ過ぎた結果、傳統を輕視するのは、却つて眞の自由を妨げるものである。「掟なし」といふ事が自由なのではない。無論、掟に縛られるのは更に自由ではない、併し、眞に掟を會得すれば、それは人を縛るものでなく、よりよく人の内面的善や美を生かし生長さす方法となる。所謂「法を越えず法に越えられず」とはこの邊の境を指したものと思ふ。

(同氏の「圖書教育私見」中の一節)

▲紀平正美氏

(文學博士學習院教授)

自由は他から與えられるものではなくして、各自に實現し實證せらるべきものである。多少の困難に出逢ひ、其を組織して打勝つた所に、壯美の感として、自己が自己と結合した状態と云ふのである。

(教育圖叢昨年四月號所載論文の中より)

▲河野清丸氏

(文學士女子大學附屬小學校主事)

道心又は良心の命令に従つてする言動に對しては、一切自由を許さねばならぬ。所謂、人心に従ふ言動は善もあり不善もあるを以て、自由を許すべき場合と然らざる場合とがある。

(中略) 自然性とは、見たい、聞きたい、飲みたい、食ひたいといふ様な心であつて之を滅する時は其の生を保つて行くことが出來ない。然し之れは人間特有の心ではなく、動物と共に有する所にして、つまり、



理性に支配さるべきものである。此の自然性の要求から出づる言動に對しては必ずしも自由を許すべきものではない。吾人は理性を以て自然性を支配し純化すべきものである。その出来るものが自由の人である。

(中略) 自由と放縱の別は理性の要求に従ふか自然性の要求に従ふかに依つて存する。吾人が子女の行動に對して自由を與ふべきか、感性のそれから來たかを見て定めなければならぬ。其の邊の甄別けんべつが父母教師に取りて最も重大な、従つて最も困難な任務の一である。理性の要求には自由を與へ自然性の要求より來るものは理性の力を以て、之れを支配し統制せしむる様に導くべきことである。(中略) 自由には必ず責任の感を伴はしめねばならぬ。日常の學習でも運動でも、臨時の行事である學藝會運動會の如きでも、其計劃實行は凡

て兒童に一任する。けれども其の巧拙成敗等凡て之が結果に對する功罪をば被教育者自身に歸するといふ風に仕向ける。(下略)

(教育論叢昨年四月號所載)

斯の如く自由の意義は、その範圍が廣汎であつて二つに分けることが出来る。即ち、自由の中には當然異つた二つのものが包容されてゐると云ふことは、恐らく殆ど誰もが認容する事だと思ふ。予は自由の中には寧ろ相反する二つのものがあると云ひ度い。又その中の一つは、縦には第二の時代に不自由な境地をつくる性を持ち、横には眞の自由の境地を作るべき心的活動に對し、直接に此の活動に障害を與へんとして働き且つ伸びんとする盲目的の自由である。之れは誰としても直に思ひあたる事だと思ふ、例へば寒い冬の日に生徒が寒いだらう



と云ふ同情から、火鉢を出して暖を取らしてやる、然るに生徒は其の火鉢に紙など燻べて手柄の様な風をして居たり、或は火鉢の側で坐席の争奪等で無遠慮に噪ぐ、火鉢を出してやつた教師から見れば、火鉢を出してやつたその旨意が解らぬかと腹が立ち又一面には危険であると云ふ所から、折角出した火鉢を取り上げて仕舞ふ事になる。然らば生徒は又元の様に寒い思ひをしなければならぬ不自由さを感じるに云ふことがある。これは縦の場合である。

横の場合の例としては、教場中に於て學習しつつある生徒が、教師の學習に熱心なる事を要求し、且つ歡こぶ風あるを知り乍ら、殊に彼等は此の時、或る程度の學習の實績を擧げることが唯一の立場であると云ふ事を知り乍ら、雜念の湧くに任せて隣席の者と私語き合ふ、折角の一時間を殆んど學習より得たる收穫なくして、空しく休憩時間に移る、麼

う云ふ事がある。

他の一つと云ふのは、洗鍊を経た後、當然得られる、前述の自由に反して、衝突性のない自由である。

然るに山本氏は自由なるものを如何に觀て居るか。同氏の説の中には、自由と云ふ語は澤山ある、先づ自由畫の自由、圖畫教育論の略圖には自由と云ふ字が列んでゐる、けれども自由の中に異つた二つのものが含まれて居ること、或は二つの自由のあることは少しも説明されて居ないで一つの自由としての取扱ひを以て一貫してゐる、たゞ自由は相對的だと云ふこと、自由は次第に肥えて行くものであると云ふことが述べてある、そしてそれが又近來になつてからである、兎に角この語のあると云ふことは、自由が二つあると見ての事だとも思へるが、盲目性の自由に就いては矢張り言及されず、全然閑却されてゐる。



それで同氏の自由と目してゐるのは、自分等が洗練を経ての一貫性を持つた自由の事である、この考へで同氏の説に對する時、よくうなづくことが出来る様に思ふ。即ち、一貫性を持つた自由一つとしての見地に藝術教育説——自由畫教育説を立て、居ると斷言して差支へないやうである。

果してそうだとすれば世間は自由に二つあるとしてゐるのに、或は單に盲目性の自由のみを自由と思つて居る者さへ随分あるのに、氏は最初は大々く自由を高潮し、後に「自由其の事を教育する自由教育なのである」と云つてゐる、だから盲目性の自由も一貫性の自由も共に育てる事にあたり、或は盲目性の自由のみを育てる事にもあたる。それが「自由畫とは絶對無干渉の放任教育であるか？」といふ叫びを見た所以であり、兎に角樂になる方へ解釋をし勝ちな世の人々にとつて、二つ

の自由の中、先づ知らずく盲目性の自由を育てることに着手し、又それが繼續される所以で、教師は凝じどとしてゐて教場内で新聞や雑誌など見ながら過すと云ふ、自由を盲目性の自由とのみ解してゐると云ふべき様な授業が行はれて居たのであつた。この事は無論良い事ではなく、教育の弊として極力排滅を期さなければならぬ。

併し自由は不自由に通じ不自由は自由に通ずるものとして、兒童を絶對な放任の地上に置くことの又意義あるものの様に考へられないことはない。自由を一つと見ても又二つと見ても結局は至るべき所に至るので同一の地點に達する二路であると考えられなければならない。けれども學校なるものゝ存在せる以上、教育なるものゝ存在せる以上、どうしても自由を二つに見なければならぬのである。或は自由を一つに見ての教育は成立しないものだと思ふ。若し成立を期さ



うとしたらば、その事の背理であつたことを痛嘆するの機會を作らうとするに過ぎないのである。多くはそうであらうと思ふ。

余は教師が最初から自由教育をなさうとするよりも、二つの自由の界線を見出すこと、二つの自由を判別すること、それ等の力を養ふことを、先づ希望するものである。その方が確かだと信ずるからである。そうして後に實現される教育が本當の自由教育であると思ふからである。

自由と云ふことに就いて山本氏と世間とは、その見解が違ふ。山本氏は何故自由畫の提唱と共に、山本氏自身として自由の解釋をしなかつたのであらう。然らざれば二つの自由を育てる事にもなり、盲目性の一つの自由を育てる事にもなる。かゝる自由の伸展は寧ろ或る約束の許に成立してゐる教育の圏外に見るべきであつて、自由畫教育の

獎勵と共に學校の全廢を高潮しなければならぬ。以上二つの中の何れか一つを取らなければならぬ、然るに其の間に彷徨してゐると云ふことは、どうしてもそこに曖昧な所がある。

二

同氏の力説されて居る「模寫を排し創造を奨める」と云ふ事に就き一言して見たい。齋藤始雄氏は「臨畫は兒童の心理より見て一つの自然の仕事である」と云つてゐる。岸田劉生氏は「眞の模倣は必ず獨創を産むに至ると同時に眞の獨創は必ず傳統を有つ。傳統のない獨創は其の内容が貧弱であつて、又藝術的獨創といふに足りないものである」と云ふ事が出来る。」と云つてゐる。模倣と創造、これは同一心理の兩端であると解すべきが穩當である。二つの心理は實は合してゐる一



つのものであると見るべきだと思ふ。それであるから模倣を離れて創造は存在しないと云ふことになり、模倣を排すると云ふことは創造をも排すると云ふことになる。

新圖書教育會では、模倣と創造との關係に就いての研究發表を、例を植物にとつて圖解を試みて居る、そして根の部分を模倣界となし、地上に表はれてゐる幹より上部を創作界と稱して居る。余は是れを洵に適切な譬喩だと思つてゐる。本當にこの通りに相違ないと思つてゐる。一植物の生育を期せんとして、根の部分を取り除くと云ふことは、どんなものであるか、それと生育との關係はどうであらうか？。こんなことを眞面目に云ふことは馬鹿々々しいほどのものである。かゝる分かり切つて居ることに對して、山本氏は極端な論を吐いて居る。それだけそこには又採るべき所がないではないかと思はれる。議

論を度外視してゐる、度外視しなければならぬ、その意氣を採るべきである。極論を極説する、その猛烈さを採るべきである。そして意氣の漲る奥底には又何にもものがある、それはなんだらう？。不純なもの、忌むべきもの、様でもあり、翻つて靜かに考へて見ると又感謝の念の湧く所がないではない。

山本氏は圖書教育に臨畫教育が、その影を没することをのみ偏に願つてゐるやうである。「此の説も漸く全國の教育會に眞面目な問題として取扱はれ來り、どうやら消し難い火とはなつたが、而もなほ、八十何パーセントは舊式體操を止めないし」と云つてゐる。眞の圖書教育が行れると云ふことは、決して臨畫法の行はれてゐる率を以て判定することは出來ないものだと思ふ、殊にそれは現在及び將來に於て一層さうである。臨畫を行つて居ても、その根本精神が分つて居れば、その事



は教育の上に充分生かされることであり、臨畫を廢したと云つても、臨畫を廢する事を以て、自由畫教育となし、たゞ／＼自由畫教育が新しい圖畫教育と解して、その根底には根底と云ふほどのものはないと云ふ教育がある。こう云ふ人達も何十パーセントの中に加はるのであるが、それはどんなものであらう。

余は眞の圖畫教育の行れると云ふことは、教育當務者に對して、教育の實際の上に流露する、燃ゆるが如き内部方面を植えつけることでなければならぬと思ふ。眞に強い内面の流動は、絶對的なものであり、この絶對的なものこそ、大なる進展性、奉仕性を包容するものである。内面に燃えて抑へ難きものは、時流を超越するほどのものでありたい。——やむにやまれぬ情熱を發揮する事の出来る、時間と空間とのあることに歡びを抱き、そして活動せざるを得ない、そして活動のために日

も是れ足らざるを感ずる境地状態を形成するため影響が大切なことであり、この事が問題とならなければならぬと思ふ。

時流を超越するほどのものでありたいとは、其の意氣に於てであつて、その仕事は又終始時流から離れることの出来ないものであり、時流を超越した絶對性は時流を同化して、自己のものとなすべきものである。こゝに初めて眞の教育の實現がある。

### 三

プロバガンダに妙を得てゐるので、今では全く全國の教育界に行き渡つて、自由畫を口にし、少なくとも自由畫なるものゝ、おほよそ如何なるものであるかを知られない者はないだらうと思ふ。そして中には、これを實施する者でなければ、新時代の教育者でないと思ひ込み、深く立



ち入つて、そのものゝ本質を噛み締め味ふに至らずして、或は要點の精神に或は或る採るべきところのものに觸れることなくして、自己の教育の實際上に、空想的な自由畫を施して行く者が少くないかと思ふ。事物の解釋は、自己の力の解釋であつて、淺薄な者は淺薄そのまゝの自己を以て、他を律すると云ふことが普通である。相反する異つた二つの方面の何れにも解釋の出来る場合には、事の正否や曲直に就いて考察を遂げる事を卑んで、深く内面と永久とに生きることを忘れて、目前の快、皮相の快、たゞ是れのみ獲得しようとして、又是を獲得することを賢明な處置だとも思ひ其の上に立つた解釋をなし、そうして樂な方に就かうとすることが、多くあり勝ちなことである。

山本氏の自由畫に就いても、臨畫を廢すること、無指導無干涉のことと解して、此の點のみを認めて、圖書科の授業には、兒童に對して、なんで

も好きなものを畫いておればよろしい、自由畫だからと云つて、只教師は拱手傍觀を守つてゐると云ふやうなのが随分無いとは云へないことだと思ふ。余は教育説の提唱には、宣傳と成案との、平行を要するものではないかと思ふ。成案があると云ふことは、仕事の方向がわかり、提唱者の親切であることを感ずる、そこに感銘がある。仕事の着手に際してこの感銘があると云ふことは、その仕事の中に流動する力の發端であつて、どんなに大切な事か知れない。宣傳力の徹底は、時代を作ることになり、時代の影響によつて仕事に着手しなければならぬ時、感銘が是れに伴はないと云ふ事は、そこに當然弊害が生ずるのだと思ふ。

この成案の無いと云ふことが中等圖書教育界から、批難された主因であり、當局からは賛成の聲の無い主因であつて、孤軍奮闘の位地に立



たずばならず、最初の素志を一貫する事が出来ないで仕舞ふのである。余は同氏が提唱に際して、從來の當局、教育者、教育法に就いて、惡罵的な論評に代ふるに成案を以てしたら、どんなものであつたらうと思はれる。併し、素志の一貫が出来ないと云ふことは、同氏の豫定であるかどうか、それは余の知る所ではない。

四

教育の方針は時代の變遷につれて、改變して行くと云ふことがあつて良いことと思ふ、或はなくてはならない場合があることと思ふ。殊に我が國の教育は、歐洲先進國に倣つて始めたことであるらしいから、從來の教科の編成や、又各教科目の目的精神等に就いては、きまつたと云ふのではなく、宿題であり、試験中であると見るべきだと云ふ氣がす

る。

圖畫科の如きは本當の使命は没却されてゐる。智的教科の目指す所と同一の點に會する性を持つて居て、その同一の點に會する、その事が全教育の目指す所でなければならぬ。それには圖畫科は智的方面と相容れない、相反する方面の追究進展を企圖しなければならぬ。此事は確かなことであり乍ら閑却されてゐる。又此の事に想到して居ない教育者が澤山居る。その性質に於て智的教科と圖畫科との境にある用器畫を、工藝の基礎教育だからと云つて、これに懸々として、境より奥に大切なもののあるのが見え、それが見えないと云ふことが、境のものを引き入れやうとする心である。余は用器畫的修養は普通教育を離れた後でもよろしく、又他の教科に移してもよろしく、時間數が現在に於て極少いこと、圖畫科に純な使命のあることを思つたな



らば、用器畫教育を斷念することが、寧ろ圖畫科を愛する所以であり、全教育を愛する所以であると信ずる。

山本氏の美術教育は、余の考へてゐる、智的方面と相容れない相反する方面の開拓を志すものだ」と判断する、そしてそこに特色があると聲明する。然らば「圖畫教育は美術教育でなくして何だ」といふことには、余は決して異議はない。併し美術教育と自由畫教育と結合して「圖畫教育は美術教育でなければならぬ」と幾度も繰返した後、美術教育であつたなら、速に自由畫教育を斷行すべし」と叫んで居る點は余の解し難い所である。

余は必ずしも自由畫教育を絶対に不可とはしない。

若し臨畫や傳統を無視して偏に直觀による表現をなさしめることを叫ぶものがあるとしたら、それは議論に於ては、缺陷があるとされて

居る様であるが、實際に於ては、何れの所の何れの人にかよつて實現されることであり、若し其の事が可なり深く實現されたとしたら、議論に於て缺陷のない、形に於て創造と模倣とを具備しての、兩方面の平行を計る教育よりも、遙かに優つたものではないかと思はれる。

それは兒童の自然に對する頭と、美術品に對する頭と、その働きの變りのある筈はなく、教師が兒童をして、美術品に目を注ぐことを避けしめることは、自然を重視することになり、専ら直觀せよと云ふことになつて、かゝる方向に導く教師の態度がよろしきを得たならば、其の兒童は自然に對する頭の働きの美的に敏感になるであらうと思ふ。

兒童が曾て臨畫を行つたことがなく、手本を參考ともしたことがなく、たゞ一に自然にのみ對することを努め、そうして自然に對する頭の働きの或る程度に高まつてゐると云ふことは、それがどうして美術



品に對する時その頭が働かない筈がある。例の自然と變つてゐる珍らしさに、一層働くかも知れない。その時はその美術品の中から、自己に適した美を觀出すことであらう。そしてその頭の働きは、自發的研究的で印象的であらう。

そして傳統の恩恵を感ずるであらう。かゝる頭の働きは尊いことである。

そして人間が社會的生活を營む以上、社會に幾多の美術品が存在してゐる以上如何に美術品に目を向けさせまいとしても、それは出來ないことであるから、傳統模倣を無視して、偏に獨創直觀に頼ると云ふことは、議論に於ては缺陷があるかも知れないが、實際に於ては實現出來ることである。即ち、此の場合、平行的同時的よりも、單行的繼續的であると云ふことが、意義の多いことになり、形に於ける傳統を無視せる教

育は、實はより深い傳統を尊重する所以である。

併しかゝる教育は出來ないことではないが六ヶ敷いことではある。人によつては六ヶ敷く、人によつては出來ないかも知れない。併し誰には出來ないと指す譯には行かない。又出來る人としてもそうである。そしてその人は極僅かであらうと云ふより他に言へ様がない。無論一般には望めないことである。

山本氏は、美術教育の中に一杯に當嵌まるものは自由畫教育だ、と云つて美術教育よりも自由畫教育が、餘程小さいのに無理に美術教育の中に移して入れる——澤山隙がある、同じやうなものをもう一つ入れることの出來る程隙がある、こんな隙があるではないかと詰問すれば、無いよ、無いから入れたんだと云つて我をとほして居る様な所がある。これは餘りに私の多いことである、この心はきざな心である、窮窟



な心である。

なぜ圖畫教育と自由畫教育との關係に就ては、結合に就ては、填充に就ては、世間に任せないのであらうか。此點を余は解し難い所とする。

五

透視畫法や、陰影畫法と云ふものがあつて、物體や景色を描いたら其の結果に於いて、此の畫法に一致しなければならず、又畫法の智識があつてこそ、繪畫として完全なものが出来る。と云ふ思想は可成りに有力な位置を占めて居た。何時の間にか自分にも深く滲み込んで居た。そしてこの思想を通じて、繪畫と云ふものを見、殊に寫生畫と云ふものを見て居た。兒童の成績も無論是れに依て評して居た。そして此の思想の型に反するものを見た時には、教師としての才能を發揮する様な氣

がして、すかさず突込んだ。兒童の中には、笑みを漏して、自分の此の處置に對してゐるのもあつたが、又けいんな顔して、もぢくしてゐたのも稀には見た。此のけいんな顔してゐたのは、今になつて考へて見ると、そう見えないのに何故そうするのであらうと思つて居たのであらう。けれどもその時はなんにも氣が着かずに過ぎた。そして教材の如きも、幾人かの斯道の權威者が、研究討議の結果完成されたもので、只完全であるとのみ思ひ込んで居た。

机間巡視をなし、又は兒童の望みに應じて、其の作品を批評する時は、缺點として自分の眼に映じた所は、必ず訂正の實行を兒童に迫つて居た。そしてそれが命令的であつたことが普通だつたと思ふ。此の事は自分が中等教育に従事してからも、矢張り繰返して居た。

その中新聞や雜誌に「自由畫」の記事が表はれて來て、自由畫の展覽會



が處々に開かれると云ふことを知るに至つた、そして其の特色が、一切臨畫を棄て、偏に兒童の主觀の表現を期するにあることに、うなづかれた。こゝに於て自分は從來の自分のやり方を反省して見なければならなくなつた。……自分の偏狹と不明とに愧ぢた……自分の圖書教育觀は變つて來た。所謂目覺めたとも言ふのであらう。

圖書教育觀の成長に就ては、自分と同様な徑路を踏んで來たものは世間に随分寡くないかと思ふがどうであらう。此の邊は讀者の判斷に讓ふことにする。

世の大部の教育者にして、自由畫の特色は臨畫を全廢し偏に主觀の表現を尊重してゐる所にあることと解してゐる様に思ふ。自由畫教育の全體を眺めて見た時、その中の一部或は大部人によつて違ふは採用しがたく、是れを棄てなければならぬにしても、たゞ一點主觀の尊

長と云ふことに對しては、多くの教育者が、一つのヒントを與へられたことであり、教育の實際の上に、一つの精神として流動することは確かなことであつて、是れが圖書教育界を動かし了た所以であり、また圖書教育の新時代を劃する所以である。

## 六

再び翻つて自由畫教育の事に就て考へて見る、自由の見解が違つてゐたにも拘はらず、それに就ての辨明のなかつたこと、模倣を排して獨創を偏重してゐる如き所のあること、無成案のこと、圖書教育に自由畫教育を填充しやうとしたこと、是れ等を非なる點として擧げて來た、併し是等の形を取らなければならぬと云ふことは、その底にやむにやまれぬ情熱の横逸あるを察する事が出来る。だから前述の非とする



點は、自由畫教育と別にすることが出來ず、或は寧ろ出現した所以である。そしてその情熱の發露は圖畫教育上の一精神を發見した所に起因し、自由畫が其の形に於て、或は聲名に於て消える事はあつても、此一精神は、圖畫教育の新時代を形成し、永遠に残ると云ふことは確かな事だと思ふ。けれども前述の非とする所は、矢張り非である、傷である。

六

## 第二章 新圖畫教育會の提唱

同會は、大正九年一月在京知名の中等學校圖畫教員十名許りによつて組織され、最初「旭出會」と稱して、府下目白なる澤柳博士邸に開かれた。その後度々研究會の儘があつて、圖畫教育に關する討論熱議が行はれた。「旭出會」とは、博士邸が府下目白の日の出山にある所から名づけと云ふことである。會長には又同博士を戴いて居る。

研究會中に行はれた重なる事項を左に紹介する。  
 第四回、大正九年五月八日、博士邸に開かれた、山本鼎氏の自由畫教育に就いて、同氏の意見の發表があつた。  
 第六回、同年七月三日、博士邸に開會、山本鼎氏との間に自由畫教育に就いて、討議研究が行はれた。

第七回、同年十月十三日、同邸開會、此の時、新圖畫教育會と改名す。

同年十一月六日には、同會主催の許に青山師範に於て、講演會が開か



れて、春山武松氏、森田龜之助氏等の講演があつた。

第八回、同年十一月十三日同邸開會、研究題目は、新定畫帖の改正問題であつて、是れに關し、東京高師教授阿部七五三吉氏の意見の發表があつた。

第十一回、大正十年二月十九日、同邸開會、左の圖書科目的案を決定した、

圖書科ハ物象ニ關スル觀察鑑賞ノ力ヲ練リ其創作力ヲ啓發シ、描寫ノ能ヲ得シムルヲ以テ要旨トス

同年七月九日十日の兩日には、國民新聞社樓上に於て、國民教育獎勵會後援の許に、新圖書教育會主催で圖書成績展覽會が開催された。

第十七回、同年十二月十日、成城中學校に於て、前東京英校教授岡田秋嶺氏の歐州視察談があつた。

同年十二月二十六日より三日間、青山師範に於て、同會主催の講習會が開催されて、阿部七五三吉氏谷餘太郎氏霜田靜志氏本間良助氏赤津隆助氏平岡信敏氏等の講演があつた。

左の論文は、澤柳博士が新圖書教育會を代表して、前記の展覽會開催前、七月六日七日の兩日にわたつて、國民新聞に發表したものである。

### 圖書教育の使命

——圖書成績展覽會に際して——

【上】

新圖書教育會が今回國民新聞社樓上に於て、兒童生徒の圖書成績展覽會を開催するに際して、自分はその會長になつて居るといふ關係上一言圖書教育に就いて述べて見たいと思ふ。

普通教育上に於ける圖書科が如何なる使命を帯びて居るかといふ事は、此の科が普通教育上に其の地歩を認めらるゝ限り、是非共明かにして置かねばならぬ事である。嘗に教育上の問題としてのみ



ならず、世間も亦學校の圖畫科に向つて相當注意を拂ひ理解を有つべきが當然である。然るに從來斯かる理解は世の人々には意外に少なかつた様に思はれて、甚だ遺憾に堪へない。

自分も圖畫教育といふやうな専門事項に向つては門外漢の一人であるからして、必ずしも正鵠に當つた事は言へないと思ふのであるが、昨春以來新圖畫教育會の諸君が自分の宅へ集合されて毎回熱心に研鑽討議せられた處をよく玩味して見るに、先づ第一に圖畫教育といふ事に對して、世間からは甚だ間違つた解釋を下されて居るといふ事を見出して居る。

從來世の多くの人々は圖畫科を以て單に繪を習はせる丈の學科だと思つて居る。それは習字を習はせると同じ様に、繪を描く技術に熱せしむるを目的とする教科であると思つて居る。そして此の

繪を畫くといふ事柄からして、それが更に精神上に影響しては美意識の發達となり、人格の向上となり、藝術的にも道德的にも其の所得は甚だ多大なるものであつて、それがやがて日常生活の上に一々反映實現して來るものであるといふ風に考へて居た様である。併し此考へは元々技術の習得から更に敷衍して行つたものであるから、圖畫科は矢張習字科で字の書方を習ひ、裁縫を習ふのと全く同一の性質のものであると、唯夫丈の事に考へられて居る。

斯ういふ考へ方は單に一般世間の人ばかりでなく、本職の圖畫教育家の中にも亦可なりあつて、世間が久しく此の考へに捉へられて居たが爲に圖畫教育は其正當の光輝を發揮し得なかつた憾がある。斯様な考へ方の誤りである事は、今日圖畫教育上の研究が非常に進歩した結果充分明瞭にせられて來た。即ち圖畫教育の目的は畫



をかゝせる事にあるのではない。畫を描かせる事は手段であつて、目的ではない。描かせる事それ自身が値打あるものでなくて、描くといふ仕事を通じて廣い意味の形と色との教育、造形藝術的陶冶となす事が大切なのである。

凡そ藝術上の働きを大體視覺に屬する働き、聽覺に屬する働きとして、此處に大きく二つに分けて見ようとする事は、教育的にも亦意義ある考へ方と謂はねばならぬ。其の視覺に屬する教科としては、手工裁縫習字等種々あるけれども、圖畫科がそのづから夫等の中心教科たり得べき任務を持つ事は從來既に認められて居た事である。而かもそれで居て從來の圖畫教授はさういふ大なる使命を遂行する力はなくて、單に畫の描き方の教授に終つて居たといふ有様である。それも眞に描寫の力が附くやうに適當に指導せられての事な

らまだしも、徒らに手本を模倣させたり、見た所のよくなるやうに劃一的の外形的教授が施されたりする事實さへある。斯かる狀勢から考へて見れば、其の道の先覺者が、圖畫教育は未だその當然の職能を發揮し得ずして、空しく埋没せられて居るのであるといふ感を懐くのも、亦無理もない事と言はねばならぬ。

【下】

今日進歩せる圖畫教育者の研究の結果を綜合して考へると、圖畫科に於ては畫をかく事に熟達せしむる事のみを目的としなない。曩にも言つた様に畫をかく事は手段であつて目的ではない。繪を畫くといふ事を通じて廣い意味の形と色との教育をしようとするのが目的である。であるから手段としては必ずしも圖畫をかゝせる許りではない。新圖畫教育會員諸君の研究によれば、簡易なる手工



の細工によつて色の配合の教授をしたり、兒童をして自ら參考品を蒐集させて之を批判せしめたり、様々な方法があるのである。今度の出品の中にもさういふ種類のものゝある事は注意すべきである。扱て斯様に圖畫科は極く廣い意味の形と色との一般的陶冶を司ると考へられて來たのであるが、造形藝術は畢竟此の形と色との了解が種々の實際材料のこなし方と結びついて來る所に生ずるものである。そして夫れが繪畫となり陶器となり家屋となり衣服となり店頭裝飾となり廣告圖案となり種々様々の現れを取るものである。圖畫教育は當然かくの如きあらゆる方面の形と色とに對して了解し得る力を作るべきであつて、必ずしも繪畫許りがその内容ではない。著作の柄を選ぶ事も室内を裝飾することも、或は又商品の陳列や廣告をする事も、當然圖畫教育の内容であらねばならぬ。か

ゝる事柄に對して充分頭が働き得るだけの基礎教育を與へて置く事が必要である。而も是等の種々なる問題を批判する頭の働きは、決して繪畫を了解する頭の働きと別ではない。其處にいづれにも通ずる基礎的な共通點がある。その働きを養ひ得るものは當然圖畫科を措いて他にないと思ふのである。

斯様な譯で圖畫教育の事實としては、畫をかいて居れば是等の問題に向つて一切足りるでは、今日は中々通り得まじき複雑さになつて來て居る。又一方世間でも圖畫科に向つて充分なる期待を懷いて、その専門々々の職業上の必要からして種々なる要求をなすべきであらう。今日美術家の方面からは美術教育としての要求を圖畫科に向つて爲されて居るのであるが、それと同様に、製造業者は其の専門の製造事業を習得する者の爲め乃至は之を批判する世人の常



識的基礎の爲めに、圖畫科に向つて形と色との陶冶を盛んに徹底せしめられん事を要求するがよからう。又商業家は其商品の陳列廣告其他諸般の商業上の處理に就いての實務の基礎として、乃至は世人が之を適當に批判し得る能力の基礎として、學校の圖畫科に向つて形と色との陶冶を盛んにし徹底せしめん事を要求するがよいであらう。随分自家の業務の盛衰上から見ても適切な影響を受ける途と思はれる人々さへが、學校の圖畫科を以て唯繪をかゝせて樂ませる風流三昧を事とするものゝ如くに考へる事は餘りに當を得ない。こは獨り教育問題としてのみならず、随分輕視し難き國家問題社會問題とも認めらるべき理由があると思ふ。

勿論圖畫教育は一面に於て、兒童の藝術的趣味性の陶冶に任ずべきものであるが、又一面に於てそれが實生活の諸問題と結び付いて

商工業上に又日常生活に重要な働きを爲すものである事を理解せしむべきである。世人は是非とも今日の圖畫教育なるものが、斯かる境地にまで進んで來て居ることを理解し、之れに對して大なる期待を持つまでになつて欲しいと思ふ。

圖畫教育の内容を斯く廣義に解する事は、或は現在の教科を更に分けたり、或は合併したりするやうなことの必要すら生じて行くかも知れない。併しそれが自然の道ならば敢て必配する心要はない。よし又左様な事にせずとも現在のまゝの圖畫科の中でも叙上の如き教育は充分出来る筈である。現に米國などかゝる内容を廣くアート・エデュケーションの名目の下に統合實行して居るのなども斯かる趨勢が謂はれなくして起つたものでない事を示して居る。

今回自分が歐米教育視察の途に上るに當つて、新圖畫教育會員諸



君は我國の圖書科成績品を彼地への紹介材料として蒐集せられた。そして國民教育獎勵會の後援と國民新聞社の厚意により、之を公開展覽する事になつた。元より各地の學校から多數集めたものであるから、その成績はまち／＼であるけれども、斯道の先覺者より成れる會員諸君の斡旋蒐集せられたもの丈けであつて、猶よく諸君の研究を語る材料に満ちて居る事を認める。自分は今次の企てが決して無意義でなかつた事を思ひ、且此の機會に際して會員の研究の結果を綜合して圖書教育の使命に就いて世人の了解を求め、批評を乞ふ事が此の際必要なる事と信じ以上の如く述べたのである。若し夫れ事の詳細に至つては、會員諸君がそれ／＼詳細なる具體的研究を重ねて居られるからして、更に就いて問はるゝなら又新なる所得もあらうと思ふ。(完)

次の一文はこの展覽會の目錄の一面に記載されてあつたものである。

今回本會々長の澤柳先生が歐米の教育視察にお出でになるに就いて成績品を持つて行つて、あちらのものと交換して來て戴く事になりました。それで此の事を雜誌に發表しました處が、全國の各學校から非常に熱誠なる協賛を得まして、小學校四十一校中等學校二十一校と云ふ多數で各地から成績が集つて來ました。元より是等は全國各地のものを網羅して居ると云ふ譯ではありませぬけれど、先づ大體に於て我國現今の圖書教育の比較的進歩せる方面を代表した成績と言つても差支ないであらうと思ひます。それで折角の成績を此のまゝ外國にやつてしまふのも餘り惜しく思はれるので、國民教育獎勵會の後援と國民新聞社の厚意により、急にこれを展覽



する事になつたので御座います。

此處に並べられたる成績品によつても見らるゝ通り我國の圖畫教育には非常に大きな革新的氣運の動きつゝある事が認められます。

模寫を捨てゝ自然に向ふと云ふ態度——即ち寫生によつて畫くといふ態度が兒童の成績にも充分認められる様になつて來て居ります。これは誠に喜ぶべき現象の一つだと思つて居ります。此の方面に於ては、たしかに舊來の因襲的な型にはまつた傾向を打破して清新なる氣分を導き入れた事を何人も認めない譯には行きませぬ。

圖畫教育の内容が單に繪畫であると言ふ様な考へ方はもう今日では行はれません。圖畫教育の内容は決して繪畫だけではありませぬ。着物の色や柄を考へる事も室内裝飾や庭園、住宅等の設計

も家具、器物等の日常生活に於ける種々な物の形や色に就いて考へる事も、或は又商品の陳列廣告等の問題も、皆圖畫科の内容として取り入るべきものなのであります。而も是等の事柄が決して別々の頭の働きではない、全く同一の働きから出て來るのであります。それで斯様な造形藝術方面の様々な現れに就いて觀察や觀賞や創作をなし得るやうな基礎的陶冶を爲すものが即ち圖畫教育であると考へられる様になつて來たのであります。斯ういふ所からして繪畫的方面の表現のみを重んぜずして形と色に關する様々な方面についての考案設計である所の圖案の仕事と非常に重んずる様になつて來ました。今度の展覽會で殊に中等學校の方にさういふ成績のある事を注意して下さい。

描くことのみを圖畫教育の全體であると認めない方針から畫く



こと以外の他の作業をも平氣で其内容として取り入れてゐます。色紙を並べたり、組んだりして色の配合を研究させるやうな事をします。参考品を澤山集めて選擇批判する事もやります。其の他繪をかく仕事でない作業が圖畫科には可成に澤山あります。紙人形や組紙の様なものを圖畫成績の中へ加へて居るのはあかしく思はれるかも知れませんが、いづれも色の配合や形の研究の練習としてやらせる仕事なのであります。紙のきり方や貼りつけ方の練習の爲めにやつたものではないのであります。

左記のものも新圖書教育會の研究發表である、こゝに又登載して研究の資料に供することとする。

### 新圖書教育の目的

#### (甲) 目的の要領

□圖畫科は形象の觀察、鑑賞及び創作により、造形藝術陶冶を爲すを以つて目的とす。

○圖畫科は物の現れを観たり、味はつたり、創作したりして、造形藝術陶冶をするのが目的である。

#### (乙) 目的に關聯せる事項の説明

一、上記の字句の解釋

二、圖畫科の陶冶對象と陶冶材料

1、陶冶對象

人



2. 陶冶材料

物

三、陶冶材料の類別

1. 抽象的材料

a 形

b 色

2. 具象的材料

a 自然物

x 植物、動物、人物、風景

b 人工物

x 繪畫、圖案、説明圖、寫真、彫塑、裝飾彫刻

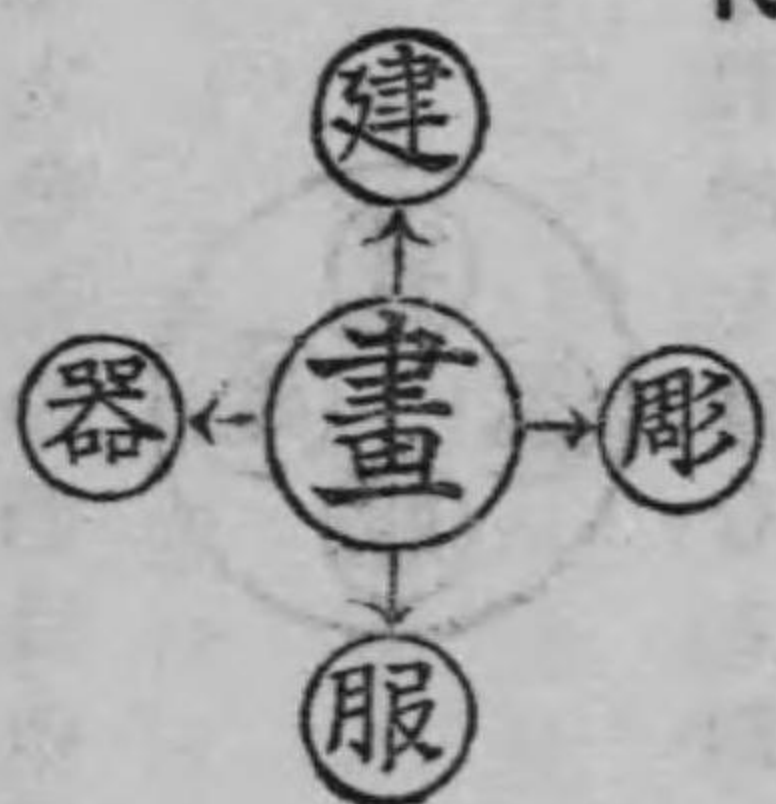
x 建築、室内、店頭、庭園

- x 器具、機械
  - x 服裝、染織物
- 四、我邦圖畫教育思潮の變遷
1. 畫だけを考へたる時代



2. 畫を中心として、それより他の藝術へ推及ぼして考へたる時代

代





3、形と色との題目の下に、一般造形藝術を包擁して考ふる時代



丙 如上の目的を認むる理由

- 1、形象の觀察、鑑賞、創作に關する、普遍的基礎と特殊的基礎
- 2、如上の普遍的基礎と個性との關係
- 3、本質價值と利用價值
- 4、陶冶の要件が目的の中に内在する場合と、外在する場合
- 5、材料取扱ひの直接的態度と間接的的態度
- 6、藝術的陶冶と科學的陶冶
- 7、目的内容の廣狹と統一不統一

### 8、圖畫科と手工科との關係

—

先づ此の會の美點としては、よく一致團結が行はれてゐると云ふことを知ることが出来る、少くも各會員の主張する所に於て、少しも齟齬がない。全く同一人の發言のやうであると切言することが出来る。それは同人が新聞や雜誌に發表して居る處を見て、そう感ずるのである。そしてその主張の要點は如何と云ふに、「圖畫教育の内容は、單に繪畫だけではない。着物の色や、縞柄を考へることも、室内裝飾や庭園住宅等の設計も、家具器物等の日常生活に於ける種々なるもの、形や色に就いて考へる事も、或は又商品の陳列廣告等の問題も、皆圖畫科の内々として取り入れべきものである。而かも是れ等の事が決して別々



の頭の働きではない、全く同一の働きから出て来るのである。それで斯様な造形藝術方面の様々な現れに就いて、観察や、觀賞や、創作をなし得るやうな基礎的陶冶をなすものが、即ち圖書教育である。」と云ふのであつて、教育の材料を實生活の上に採つたと云ふことに注意せずには居られない。

此の會の提唱の動機をなし、又精神の存する所は、一は現今の藝術教育(或る種の)に反抗し、一は實用を通じての實績を以つて社會に對し、眞に社會をして、圖書科より受ける福利を體驗せしめ、圖書教育の輕視すべきにあらざることを、感得せしめんとするにあると信ずる。そこに充分潑刺たる意氣と、決心とを見ることが出来る。一致團結の行はれてゐる主因は又こゝに存するのである、従つて現在及び將來に於て、圖書教育界に對し大いに影響する所のあることを想像する。

## 二 併し提唱の動機、提唱の態度に至つてや、稍沈靜を缺いた所がなかつたかを思ふ者である。

思を深さに致し眞に圖書教育の本質を洞察し、その本質より来る必然性の上に立つた提唱でないやうに思はれる。自分は圖書教育の本當の目的使命は、決して功利化した圖書教育の所になく、感激の世界の開拓、靈的方面の開拓に資する、偏に美育を志す藝術教育をなす所にあると信ずる。

予は實利を超越した飽まで美意識の生長を期する、そして美意識の活動が、彼等の生活の一面を領し、彼等の人生觀に滲透すべきを企圖する藝術教育としての圖書教育でなければならぬと思ふ。その方法としては、時により、人により、一概に極める事が出来ず、常務者自身が自



らその進路を開拓する、決心と意氣と奮闘とを希望する。

三

從來の教育の缺陷が主智主義であり、物質主義であり、實利主義であつたことを、擧げない譯には行くまいと思ふ。現在の教育を理想的のものに近づけるには、實利の偏重を防ぐ教育でなければならぬことは勿論である。然らばその衝にあたる教科として、主要の位置にあるものは、修身科と圖畫科でなければならぬ。修身科は精神の輪廓を示し、圖畫科は此の輪廓の内部を填充するものであると云ふ氣がする。

然るに新圖畫教育會の提唱は、なんぞ、率先して實利主義を高調してゐるではないか。又彼等兒童に手工的方面に深入りさせると云ふことは、分業の發達してゐる今日、迂遠なことではないかと思ふ。若し彼

等が物質生活上の必要に迫つて、手工的作業を行はねばならぬ場合には、自己の仕事に對し、審判的感情の働く以上、自ら材料も蒐集し、適當の處理をなすものである。それよりも大切なことは美的教育の徹底を圖ることではないかと思ふ。「而かも是れ等の事が決して別々な頭の働きではない。全く同一の働きから出て来る」と主張するその源泉は、なんぞ、その本體はなんぞ、「圖畫教育の内容が、單に繪畫であると云ふ様な考へ方はもう今日では行はれません。圖畫教育の内容は決して繪畫丈けではありません」と云ふのであるが、美の教育のためには、繪畫が一番直接的ではないか。即ち比較的鋭敏に美の經驗が出来、早く手輕に着手する事の出来る利便を具有してゐるのではないか。そして繪畫を描くと云ふことは、空に行はれべきものではない、漫然と行はれべきものではない、精神活動に即して行はれべきものである。描くと云ふ



ことがよく行はれると云ふことは、即ち精神活動がよく行はれると云ふことである。又その精神活動は、外部との交渉と離れて成立しないものであるからその精神活動は、過去の外部に根ざし、現在の外部に繪となつて現れ、それが再び將來に於て外部よりの吸収を促進するものを植えつけるのである。そうして此のことが反覆されると云ふことは、彼等兒童の内部を太らして行くと云ふことであると思ふ。繪を畫く時に精神活動がよく行はれるには如何にすべきかが問題で、「描くこと丈け」が決して行はれないことでも、舊いことでもないやうに思ふ。

四

殊に予の最も不快に感じ、不思議に感ずる所は、「描く其の事は目的

ではなくて描くことを通じて、形と色との陶冶である」と云ふことである。手段よりも目的に重きを置くやうな傾向はどうかであらうか、將來の幸福を目的として現在の自由と精神とを犠牲視する事は、自發的ならまだしも、他から勸めると云ふことはどんなものであらう。目的を他日に置いて、現在の體驗を輕視し或は第二義的に觀た所に危險性を帯びた不安定的なものが宿るのではないかと思ふ。余は繪畫の作品は、藝術的經驗の滓シヅメであり、其の藝術的經驗を追想する記録に過ぎないと云ふ風に考へたい。然らば此の場合も又描くことは目的ではなく手段であつて目的は體驗にあると云ふことになる。描くと云ふことは解釋によつて目的にも手段にもなる。余の言はんとすることは、重きをなすものを、將來の完成を通じての現在の體驗そのものに存する——と云ふことである。仕事の目的を現在以外に置かれて、そして



體驗の事が、説かれ居らず、輕んじられて居ると云ふことは、餘りに功利的教育である。かゝる教育が人間を淺薄にするものではないか。

幸福の對象が外部にあつて、外部を完成しやうと努めるよりも、内部を完成して或は或る程度にして、外部を完成化する内部をつくと云ふのが教育の目的でなければならぬと思ふ。

次に將來のこと(他の事)と現在の體驗との關係に就いて一言述べて見れば、「人事を盡して天命を待つ」と云ふことは、自己が興へられたる一事に對して、當然のことをなしつつあつて、その仕事とその自己を顧みる時、そこに感銘がある、その感銘は聽て天命を待つそのものである。又天命を待つ所、そこに平靜があつて所謂當然の事に對して、その刹那々に味ふものありつゝ處理して行く心的状態は醸成されべきである。細心は大膽の上に立ち、大膽は細心を根底としたものでなけ

ればならない。

當然の理由があつて如何なる時に於ても、苦難を克服すべき意氣あると共に、汲々として、自己の爲す所に、現在の事に遺算なきを期さねばならぬ。その過程が重要でなければならぬ、本當の教育は此の體驗を重視するものでなければならぬ。

然るに此の會の主張する所が體驗を第二義的に取扱はれてゐることを遺憾に思ふのである。倫理方面の多くの説を發表せられて居る澤柳博士にして、平氣でかゝる議論を述べられてゐると云ふことは余としては不思議に感じて居ることの一つである。

餘りくどくしい様であるが「描く」と云ふことに就いてなほ一言したい。「描くことそのことは目的ではない」と云ふのは、餘りに世に對し、兒童に對して暗示的である。現在は或はつまらないかも知れな



いが後に良い事がある——と云ふやうにあたる。現在と云ふものは後のための準備の様になつてゐる。少くも準備教育の觀を呈して居ると云ふべきではないか。それでは兒童を器械視する様にもなり、愛から離れ勝ちにもなるのではないか。

澤柳博士は「教育は生活なり生長なり」とする米國デューイ博士の説を信じ、「我々は理論として誤謬であり、實際上に於て幾多の弊害ある準備主義を斥けんとするものである。恐らくは兒童中心主義を排して準備主義に據らんとする教育者はなかるう。果して然らば我教育者は深く其の思想の内に浸み込んでゐる、此の多年の準備主義を斥け去ることを力めて貰ひたい。」(大正十年一月四日、神戸新聞所載博士の論文の一節)と唱ひて、準備教育を排斥さなければならぬことを、世に慫慂してゐる。博士は此の會の會員達の主張する所は、準備教育で

はないとせられるのであらうか。此の會の主唱する所と、準備教育との關係に就いて、自分は博士の高見を伺ひたいものである。

會員達の研究の結果の發表によると、繪畫と云ふものと陶冶材料と云ふものが、同様な位地に置かれてゐる、即ち中心と云ふものがない、どこから始めてどう云ふ所に力を入れべきであるか一向分らない、中心はなくてもよいとするのであるか。中心は教授者各自によつて、自然と出來ると云ふのであるか、その邊を明にして貰ひたいやうに思ふ。

## 五

藝術教育の達成を見る所には、美意識が鋭敏に働き、或は感性が鋭くなることと、別なものではない。谷鐘太郎氏は、感性が鋭いと云ふ所から、禍ひを招くことがある。教育者として、この感性の鋭さを期



待すると共に、それより起る禍ひに就いての顧慮と指導法とを必要とするると云ふ意味の論文を圖書研究に昨年夏發表したが、全く同氏の言はれる通りだと思ふ。被教育者の上にも、どこまでも謬りなからんことを企劃するこそ、眞の教育者であると云ふべきである。同氏が教育に就いて、如何に深甚なる用意が拂はれて居るかを知ることが出来る。今長い論文中から、比較的同氏の意志を表明してゐると見るべき部分の一節を抜萃して次に載録する。

圖書教育に於いて藝術的の感じが鋭くなるやうにと、只管希つての教授は結構であることには異議はない。されども若しそれが他の半面の事實、即ちそれに伴ふ副作用の多寡及び其處置法が究明せられて居ないでの仕業であると、それでは甚だ粗漏、不謹慎、且つ危険な教育者であるといふことを否定する譯には行かなくなる。(中略)

藝術的陶冶の他の半面は必然道德的影響であらねばならぬ。それを高雅なる情操を練り品性を高めと云ふやうに其の良果の方面だけ眺めて樂觀して居るでは、餘りに盲目的であり、亂暴であり、自分勝手である。(中略)さうして一面藝術的陶冶を行ふと共に、一面道德的警戒が充分に拂はれて居らねばならぬ。此處の用意を怠る者は、圖書教育者として甚だ其責任を盡さざる者である。

と云ふので我々にとつて洵によい箴言である。氏の説の如く此の副作用に就いての用意は教育者としてなければならぬ、出来るだけ副作用を撥無することに努力すべきであるが、神ならぬ身の、其の徹底を期しがたく、若しあつたとしたらどうであらうか、予は是れを差支い無いものと斷定するものである。即ちなからんことを期するその動機を尊ぶのである。被教育者自身にとつてはあつては差し支へない



のである。教育者としては出来るだけ是を排する事に遺算なきを努めなければならぬ。それは自己を捧げることによつて可能され、生活の對照、精神生活の對照によく自己を捧げ得る所に、眞の幸福が宿在すると思ふのである、けれど對照をよく知り自己をよく知ると云ふことは大事なことだと思ふ。明より發して進んで不明の境に入るべきである。絶對の境に入るべきである。それは自己が有する一個の心のためである。自己が自己の心を傷けないためである。自己の内部の順調な發育を期するためである。豊富にするためである。

自己が自己の内部を思ふ時、靈感の頻りに湧くのを覺える、感激の涙は拭きもあえずに下る、こゝに於て深刻に靈福を味はずには居られない。法悦の境と云ふのも是れに外ならぬ。

以上の如く教育者としては、どこまでも遺算なきを期すべきである。

が、被教育者自身にとつては、善や美に根底する禍はあつても差支ないものだと思惟する。善や美の存する事は、却つて善や美のないよりも禍ひの纏ふことにはある。それが善や美の徹底さを示すものであると云ふ場合はある。或る場合に於いて、禍を受けたと云ふことが善や美のたしかな存在を示すことであり、或はその程度の高きを物語るると云ふことはある。そして善や美に根底する禍は寧ろあるのがよく、それは此の場合の禍は更に第二の奥深い、善や美に至る徑段とならなければならぬと思ふからである。それが善や美の特質であり生命であると思ふからである、それが眞理であると思ふからである。若しそうでなかつたならば、善も美も——人類も存在しないものだと思ふからである。自分には是れが強く滲み込んで居る。けれどこゝに一考の必要がある。それは善や美に對して、謬見を避けることである、即ち善



や美に對する開眼に就いてのことであり、洞察力に就いてのことである。——矢張り美の教育がどこまでも必要である。

## 六

圖畫教育が美育でなければならず、藝術教育でなければならぬと云ふ事は、予は本當のことだと思ふ（こゝに藝術教育と云ふのは既に前項に述べたものである）。けれど現在の實狀とは懸隔があつて、相容れないものとなすかも知れない。なんと云つても共鳴のない所には、着手も實現もなくて、たゞ文句のみあると云ふことがあり勝なことである。同會の主張する所は、議論の上には随分缺點を觀出すことが出来る。併しこれは前章に於て述べた如く、議論の上に缺點のあるのは、時にその奥底に絶對的躍動の核心が潜む事のあると云ふことである。同會

の主張は、矢張りよくこの事を物語るものであると思ふ。同會がよく一致團結の實を擧げて居ると云ふことは、又是を物語るに外ならぬと思ふ。

けれど教育の理想から觀する時は、どうしても第二位に置かなければならない。

予は右の一句を書き下す前、筆を擱いて靜かに考へた。自分が圖畫教育界に身を置く者でありながら、この言を吐くと云ふことは、叛逆者であると思ふ氣がした、そして親しい友を失ふ時の様な淋しさと苦しさを感じた、けれど自己を欺くのだと思ふ時、又苦しさを感ぜない譯には行かなかつた。——自分としての眞の態度であると思ふ時、一つの感が流れるのを覺えた。



### 第三章 齋藤氏の自由畫教育

齋藤始雄氏は大正元年高崎中學を卒業し、大正二年群馬師範二部卒業後大正八年圖畫(鉛筆、蠟筆、毛筆、畫用器畫)科の中等教員試験に合格し現に群馬縣師範學校及び同縣立澁川中學校に教鞭を執つて居る。著書は最初に圖案教育に關するものを出し第二回として大正九年十月「自由畫教育論と實際」を出し更に大正十年七月には「圖畫教育上の四大改造論」を出してゐる。

齋藤氏の提唱にかゝる自由畫教育は同氏の著書「自由畫教育論と實際」に依據しその中より重要とも觀るべき箇所を拔萃して是れを載録し一部を讀者の参考に供し他の一部に就いて考察を遂げることにする。この拔萃は余が勝手に行つたものであり、一二の順番を附したのも後の論述の便に供したいためにこうしたのであるからどうぞ御了

承を願ひたい。齋藤氏にもお許しを願つて置く。

#### 「第一章自由畫といふ言葉」の中より

私の考へてゐる自由畫なるものは恰も國語科の綴方に於ける課題法と自由選題との關係のその如きものである。であるから自由畫に對して起つた自由畫の様な狭い意味内容を有するものではない。

又何かに反抗して起つたものではない。又不自由畫なるものゝ假定を要しない。

自由畫を提唱すべき正當の然も必然の理由によつて起つたもので、圖畫教育の始期とその起原とは同じくしてゐるものである。



私の自由畫は正しい意味の自由畫である。「自由畫教育の要點はすてきに簡潔だ、たゞ一句で盡せる、曰く「模寫を成績としないで創造を成績とする」といふ様な風に自由畫に對して單に創造を成績とする丈を期待してゐるものではない。私の自由畫は兒童の自由研究發表、思想の自由發表、技術の自力處理、自學自習、自治訓練等をも期待をしてゐる。

二

美術界の豊富な知識や、水彩畫油繪位を描く能力、兒童の作品の良否を辨別する力等を具備することが教師としては敢て大切なものであるとする、最少限としても。

「第二章自由畫の要點について」の中より

一

然らば貴様の自由畫はどんなものかと問はれたならば私はこう答へることに躊躇しない。

「何も名稱まで變更したり抹消したりする要はない、私の自由畫なるものは臨畫、寫生畫、考案畫、記憶畫の中にある」といふ。

もつとわかり易くいへば圖畫教育の方法は次の四があるが、自由畫と言ふのは、臨畫の中、寫生の中、考案畫の中、記憶畫の中で、教師の課題的示範的の練習以外のもの即ち自由練習の部面である。

二

私は臨畫全廢といふ點で山本氏の提唱に反對する、私には臨畫を止める必要を認めぬ、それは次の理由が私にある。

第一、臨畫は模倣であるけれども兒童の圖畫教育上、彼等に模倣衝



働のある以上、教育的價値あること。

第二、兒童の表出力の行きつまる事があるといふ豫想がつく、それを救ふには模倣が唯一である。

第三、臨畫は美を鑑賞する一方便であるといふこと。

第四、臨畫を課したために兒童の個性の表出にそれ程惡影響は及ぼさぬこと。

第五、臨畫の仕事は兒童心理上より一つの自然の仕事である。

三

餘り抽象論では困るなら一例を舉げて私の自由畫を説明しやう。寫生教授に於ける自由畫は次の様に大體進んで行く。

一、先づモデルを興へる。(モデルの据え方、配置、日向の工合は凡て彼等の自由に任す)

二、自由觀察を命ず(この間質問に應ず)

彼等はどうモデルを見るか、モデルに對して如何なる感じを持つかを注意す。

三、自分の觀察や感じた印象を如何に表すかの工夫をなさしむ。

四、表出練習を命ず。

(机間巡視によりて質問に應じて適當の指導する)

四

要するに山本氏と私と意見の差は、

第一、臨畫全廢せよといふのと臨畫は教育上價値ある故に改造せよといふ所。

第二、自由畫とは不自由畫に對する言葉だといふのと課題法や示

三、範法に對して自發的の自由畫練習の意味に取扱ふといふ所。



第三、それで内容がもしも同様であり、教授上の教師の頭の持ち方を兒童の創造を助長させる様に考へよといふ丈ならば從來の通り、臨畫、寫生畫、考案畫、記憶畫として取扱へといふ所。

第四、宣傳して置いて具體案を示さないことの不親切なること、之は教育實際家を誤らせるからであるといふ所。

以上の四點に於て重なるものである。然しこの四點は簡單ではあるが根本思想の相違である。そして圖畫教育を誤らせ破壊するのと、圖畫教育を是正するのとの分岐點をなしてゐるものである。

「第三章自由畫の主張」の中より

一

私の自由畫の主張論は山本氏のいふやうな是正論的のものでは

ない。圖畫教育の本來の要求であり、圖畫教育の主眼點であり、圖畫教育の一面を擔當してゐる理想の到達點である。私はこゝにいふ點より眺めて必要論を組み立て、自由畫教育の主張をするのである。

今迄の多くの圖畫教育の實際を見ると臨畫は云ふに及ばず、寫生畫の授業でも、記憶畫の教授でも、はげしいのに、至つては考察畫の教授までも、兒童は教師の示範に依り又は他の參考品なりに依つて、之を唯一の技巧の頼りとして、自分の腕や眼や頭の活動を壓しつぶしかたづけ置いて、模倣をのみ之れ事とする様になつて居つた。

私は數十萬の兒童が全く劃一にひからびた手本に導びきられつゝあつたとまで、云ふ程の誇張的斷言はする勇氣は持たないが、兎に角模倣を練習する機會をのみ兒童に與へてゐたことは、しばしば見受けた、そしてそれには可なり閉口してゐた。



然しこれではほんとうの意味での描寫の技術はつかない。小學校の圖畫科の要旨では普通の物體を正確に描くの能を得しめるといつてゐるのだが模倣を餘り多くしてゐては肝心の物體を正確に畫く能を得しむることさへ出來ぬ。それは物を見て臨畫することは出來る様になるであらうが、一人立つて獨立して畫くことが出來ないといふ意味である。

元來正確といふことには私は二様の見解があると信じて居る。それは主觀的に正確なる印象を畫くこと、即ち自分が感じたまゝを畫き出すこと。その二は、客觀的に正確に畫くことで寫實の事である、即ち法則に照しても寸分違はぬ描寫といふことである。

美術家の多くは前者を出張するのが常であるし、教育家の多くは後者を主張すると迄は云へぬがそんな傾向があるとは言へる。

或は後者を指して、一部の美術家からは、不自由畫といはれ、そして前者を自由畫といはれてゐるのかも知れぬ。

一體小學校の圖畫教育は私の察する所文部省當局に於ても下學年の圖畫は記憶畫の如き自由なる兒童の思想發表を目的として課すのが良いと云つてゐる。それは新定畫帖の精神より窺つて困難なことではない。これとりもなほさず自由畫の獎勵である。山本氏の言ふ自由畫教育の要點と同一なるものである。然るに不自由畫なりといはるゝ所以のものは、その實際家の頭の足りないため取扱ひの悪い爲めに不自由畫となしたるためである。何も文部省の當局の罪とすべきではなく實際家の至らざる罪である。

二

兒童に描寫の能力を與へるとか、自童の有する技能を引き出して



やるには模倣といふ仕事も必要であるし、創造といふ仕事も必要である。斯る仕事をなすにはどうしても兒童の自發心に共鳴させる様な教育の方法を取つて行かなければ駄目である。圖畫の押賣り練習でなく、進んで買ひに来る様に仕向けたい。描寫練習を強ふるのでなく、彼等の已むに已まれぬ要求から自發的に練習させた。パンプの形でなく、アクデブの形に於てしたい。然して斯くあらしめるには何を描いても自由畫練習である所謂私の自由畫教育によるより外はないのである。こう考へると自由畫教育は全く、その方法に於ては自學主義の教育そのものである。

そこで自由畫なるもの、圖畫教育に於ける必要は圖畫なるもの、本質より出で来たものであるといへる。そして圖畫教育の主眼點であり、圖畫教育の理想であり、圖畫教育の到達點であると主張するのだ。

るのだ。

然し山本氏の様に自由畫は圖畫教育の唯一の方法であるとは言はない。そこが氏と私との見解の差異點であり、且つ重大な意義ある所であるのだ。

三

創造と鑑賞とは圖畫教育の生命である。自由畫教育は正に其の教育法の眞髓であり心棒である。

四

一體自由といふ事は既に人間全部の欲する所である。自由が人間の生き甲斐ある所である。兒童は一層自由を欲す、それは大人程不自由の世に生活して不自由に馴れて居ないからだ。兒童は大人より自由の生活を實行して居る、家庭に於ても學校に於ても、社會



生活に於ても自由で露骨で、偽りなき衝動的の生活をしてゐる。是れが兒童の自然性である。だから自由畫が兒童の本然の性質に合したものである。

斯う書けと言へば(普通の場合兒童の自然性が傷けていやに大人らしく、形式的に出來上つてゐない兒童であるならば)いやですといふのが寧ろ本當だ。左へ向けと言へば反對に右に向く。お止めなさいといへば、益々盛にやる、是れが兒童の實際だ。この實際から見ても如何に彼等兒童が壓迫をさけ不自由を嫌ひ、強く、自由を要求するかどうかがはれるであらう。

五

自由を許せば放任になり、指導示範をすれば不自由になり壓迫になる、この中庸を歩む所に教育の困難があり、同時に言ひ知れぬ味がある。

あるのである。

六

之を要するに私の所謂自由畫教育は兒童の天性を自然のまま、最もよく撫育するものであり、圖畫教育の理想であり、圖畫教育の最良の方法である。將來の圖畫教育は自由畫の時代となるであらう。

私は世の凡ての、教育實際家にこの意味で自由畫をお奨めするのである。

主張の方面としては以上で一段落を告げたのである。阿氏の提唱の長所とも見るべき具體案につきその要領を擧げ参考に供することとする。自由畫と實用的圖畫と題して兒童の實生活の上の又家庭の職業の上の裝飾的部面に對する、是れに應用すべき圖案方面の指導につき實例教材等を示して詳述せるもの、「自由畫教育の方法と其の教案」の



題下に第一の方法より第四の方法まで寫生、考案畫、記憶畫、臨畫等四種の場合の教案が擧げられて居り、「自由畫教育實際」といふ所には自由畫の教材選擇標準としての第四までの條件に就いての所説があり次に「自由畫教育目録(細目)」として尋常科第一學年より、第六學年まで、題目、教材、方法に就いての表が提供してある。

一

以上の論述に於て注意すべき所、主要な所は氏の考へてゐる自由畫なるものは、綴方に於ける、課題法と自由選題との關係のその如きものであると云ふこと、山本氏が兒童の創造だけを期待してゐるのとは違ひ、自由研究發表、思想の自由發表、技術の自力處理、自學自習、自治訓練等をも期待してゐると云ふこと、臨畫の中、寫生の中、考案畫の中、記憶畫の中で教師の課題的示範的の練習以外のもの、即ち自由練習の部面で

あると云ふこと、臨畫は圖畫教育になくはならぬと云ふ事等であるがその説明に關しては自由練習のことは氏が豫ての研究の結晶とも見るべき圖畫科中の四種の圖畫教授案を以て明瞭にされ、余等にとつても導かれる點が随分ある。氏の自由畫教育なるものゝ一面がありありとうかがはれる。けれども自由選題の事に就いては、餘り説かれて居ない様である。

「好きな繪を描く」と云ふ時、よくこの事は實現されるのであらうが、その時の場合、その他の時の場合、大體如何なる風に實施されるのであるか、その例などを示されてはどうであつたらうと思はれた。

通觀する所、同氏の所論の中には忌むことの出來ない一精神の閃きを見る。これは予の最も欣快とする所である。即ち教育方法を彼等兒童の自由——個性——主觀——を尊長しての上に樂くと云ふこと



は、圖畫教育の本質に就いて冷靜に考察を遂げて來た者の當然得らるべき見解である。只管臨畫の全廢を期する、そして不明瞭な所のある極端な所のある山本氏の自由畫の跋扈を見る今日齋藤氏が決して臨畫を排斥する事なく、寧ろ重要視して、從來の圖畫科の範圍を以て、たゞ一に其の教育の方法實際の上に、兒童の自由を認め、その生活世界を中心としての用意の拂はれた、そうして個性の生成を期待する、自由畫教育の出現を見たのは、一は山本氏の自由畫を行はんとしつゝあり、迷ひつゝある者に對し、一は官僚的な客觀的な從來の圖畫教育に對して、洵に早天の潤雨とも云ふべきである。

こゝに於て同氏の提唱を圖畫教育上の一思潮として紹介する所以である。

二

山本氏が極力臨畫の全廢を高調するに對し、齋藤氏は寧ろ臨畫の尊重すべきを主張した、この臨畫廢止の否定は山本氏の自由畫教育の多くの反對論の中に大抵見ることが出來た。併し齋藤氏の如く大々的に行つた者は洵に少かつた。そこに同氏の勇氣と自信との閃きを見ることが出來て心強く感ずる。

臨畫の廢すべからざる事は、前章に述べた所であるから、こゝには略すこととする。

尙齋藤氏の提唱上の美點ともすべきことは、具體案の用意があり、夫れが提唱と同時に發表されたといふ事である。同氏も、自由畫教育の方法と其の教案の章に於て述べてゐる様に、優良なる教師ならば教案



なしに、兒童の面前に彼等に接しながら仕事の順序が出来てくるといふ様な刹那々々臨機應變の處理をするのが最良である」と云ふ様に如何なる教育者の手になれる具體案と雖もその具體案が多くは教育上の眞の力となるものは洵に少ない。眞の力であるものは、教育者自身の内部に存するものゝ働きそのものである、それであるから他人の具體案などあつてもよく又無くてもよく、どしどし授業上の處理法が行はれて順調に進行する程の敏腕家であり闘士であつてこそ始めてその具體案は最もよく生かされるのだと思ふ。即ち他の具體案の必要を感じないまでに自己が自己のものを既に有して、そしてその人がよりよくと云ふ意志があり、固陋不屈でない以上、他の具體案の中より、最も自己に適した部分を探擇して、是れを自己の物となさずには置かないものだと思ふ。

そこに本當に他の具體案なるものゝ効用がある。

以上は特殊の部に屬するものと云ふべきものであるが、更に一般に就いては如何なる物であらうか。或者は是れによつて大體の進路方向が分り、こゝにヒントを得て、自己の教授の上に新味を加へて見んと心が起り、早速翌日から試みる事になり、其の結果は兒童も従来より稍活氣を見せたと云ふ所に味を得て乗り氣になつたと云ふ風に自己の教育に一革命又は小革命を起すのがあり、或る者は、具體案が目についた時それが臍氣ながら、或はその中の僅かの部分に就いて、潜在的に腦裡に残つて居り、それが時々折に觸れて出現し、外界をのぞくといふのがある。

具體案が眞に生かされ直に力となると否とは、具體案そのものより之れを受け入れんとする教育者各自に關することが多いと思ふ。



教育者各自の内部に燃ゆるものがあると云ふことは苟も具體案として世に發表されてゐる以上其中より必ず採擇し得るものがあるに相違ない。

事物の解釋は、其人の、事物を對象として實は自己の内部方面の解釋表明であることを前に述べたが、この事に就いて猶一言述べて見たいと思ふ。

余が會つて東京驛から乗車しやうとして未だ發車まで時間が有るので、待合室で待つて居た事があつた。その時驛内を掃除する女が頻りに窓硝子を拭いて居た。

此の時自分は次の様に考へられた。

此の停車場は日本第一で代表的である。外人が日本に来る時は悉らく大抵この停車場に昇降することであらう。その時此の停車場が

奇麗であるとなひとは、彼等にどんな感じを持たせることであらう、掃除が行き届ひて居ると否とは、彼等に與へる影響が違ふことであらう。そこで掃除婦にとつては日給が極つて居るのであるから、或る範圍に止めて其日を過せばよいとも考へられるが、又此の停車場をよりよく奇麗にすることは奇麗な日本の一部を外國に紹介することにもなり、此の場合の掃除が重大な役目を持つて居る様にも考へられる。

即ち兩様何れにも考へられる。

狭く解釋することは其の内部が狭いからである、或は狭いものに觸れてゐるのである。

廣く解釋をすると云ふ事は廣いものがあり、或は廣いものに觸れてゐると云ふべきである。

この二様の解釋の仕方は其の掃除の仕方の上に、二様の形を取るも



のだと思ふ。

即ち一は自己の働きを減殺せしめ、他は是れに反するもののだと思ふ。自己の働きを増大して行くと云ふ事は、自己の創造性を發揮して行くのだと思ふ。

自己創造の旺なことは内部に燃ゆるものゝあつてのことだ。

内部に燃ゆるものゝあると云ふことは、自己の働きを増大することであり、如何なる外部をも遂に生かすものだ。

如何なる外部をも生かすことは、日給の極まつて居ることを考へて自己の働きを減殺する事が出来ないものだ、それを許さないのだ。

こんな事を車中の人となつてからも考へを續けて居たことがあつた。

教育者が他の具體案を生かす事の出来ないと思ふことは、教育者内

部に燃ゆるものがないからだ、これは創造性に乏しく教育に對する見解などが關係してゐるのではないかと思ふものである。

### 三

同氏の主張の中には、圖畫の押賣練習ではなく、(中略)彼等の已むに已まれぬ要求から自發的に練習させたい。

或は又、私の自由畫教育は兒童の天性を自然のまゝ最もよく撫育するものであると云ふのであるが、兒童の已むに已まれぬ要求からの自發的練習が果してよいものであるか、又兒童の天性なるもの及び自然のまゝと云ふことが、果してよいことであるかどうか、こゝは大いに考ふべき所だと思ふ。自發的と云ふことと天性と云ふこと、自然のまゝと云ふこと、是れは藝術的教科の指導に就いては、決して輕視することの



出来ない要件であり、対象には相違ないけれどもこゝに考へべきことがある。それは天性と云へ、自發と云へ、自然のまゝと云ふものゝ中に、相反する二つのものが包容されては居ないかと云ふことである。前章に於て自由に二種あることを既に述べたが、其の解釋は又こゝに適用することが出来ると思ふ。

即ち一は生成を祈願する対象そのものであり、他はこの対象を傷けんとして働く盲目的のものである。

そして一のものゝ生成を期すると云ふこの半面は是れを傷けんとする他のものゝ増長盲動を防禦する？——ではいけない——性質を變化することゝこの變化することは教育者自身の精神的成長を期することが主なるものである。こゝに教育の必要があるのではないかと思ふ。この事の考慮を望むものである。此の點の見解が山本氏と齋藤

氏と同様であつて、同時に又共通な缺陷を持つて居ると云はねばならぬ。齋藤氏は、自由畫の要點に就いての章の所で、各地方の參觀をして見ても「私は自由畫をやつてゐます」と云ふ人の授業を見ると兒童に向つて「今日は自由畫だから皆さんの好きなものを畫きなさい」と命令したのみで、教師は兒童の描寫不能の訴の聲も、描寫上の質問の聲も一言の下に斥けて少しも答へぬ、そして雑誌を讀んでゐる。授業の後で説明を聞くと、「教師が兒童の間に答へると兒童の表出力を害し創造力を傷ける」と言つてゐた。兒童の勝手に任せるものは放任畫といふのである。教師は放任によつて完全に効果を收め得たるものと彼教師は思つてゐるらしいと述べてゐるが、そして同氏はかゝる弊から援はんとして提唱をなしたのであらうが、前述の缺陷を具有して居る爲に此の如き弊は依然として存續されて居るのではないかと思



ふ。少くも提唱の効果が薄弱であつたと云へ得るのである。

四

尙具體案の方面に就いて一言して見れば、前に掲げた第二章自由畫の要點についての(二)の所に同氏の自由畫教育の一例が擧げてあるのを見るに、矢張り自由と云ふ事が、可なり重く視られてゐるにも關はず、美の教育に就いての考察は餘り遂げられて居ないと思ふ。

余は此の中に美の指導に就いての部面を、より以上つくるべきだと思ふ。例へばモデルに就いて「自分(教師)としては斯の如き點に美感を抱く」と云ふ様な説明が欲しいのである。

次は自由畫の教材選擇標準の所であるが次の四項の擧げられた事は洵に適切だと思つた。それを左に採録する。

第一、小學校の各學年の兒童が一般に好める畫題より選擇したと。

第二、彼等の生活、即ち學校生活、家庭生活、日常生活に接近し親しめる事物事象を入れたること。

第三、その次は彼等の全く自由選擇に任ずる題目を置きたることである。

第四、これは教師方面よりの要求である。即ち兒童の心理上より見て又圖畫教育上より見ての要求を挿入したのである。

右の各項に就いては一々説明が附してある。

又其次の所には、尋常一學年の圖畫教授の時間數を合計四十時間として、三十時間を自由畫教育にあて残りの十時間を鑑賞教育なり、示範



による教育なりに使用するのであると述べて居る。この「示範による教育」なるものは如何なるものであるか、示範による教育は同氏の自由畫教育の中から除くのではないのであらうか、又若し含まれるとしたら、四種の圖畫教育の自由練習との關係はどうなるのであらうか、これには全然加味されないのであらうか。この點を知り度い氣がした。余は「示範に依る教育」は全然除くか、又若し含まれるとしたら各種の圖畫教育の中に兒童に及ぼす影響を考へつゝ、教師の其の表現の法に留意しつゝ、多少加ふべきだと思ふ。

五

是れを要するに同氏の提唱は、自由畫教育ではあるが、臨畫廢止を否定してゐる事が第一の特色であり、亞いで具體案の提供あること、圖畫

科中各種の圖畫教育に對し自學自習主義の教育を施すと云ふのである。

この點は實際家各自に於て相應に取り入れべきである。又其の許容しがたい方面としては、自由に二種あることを無視し、其の二つのものを一つに見て而かも其の自由を偏重し、そして圖畫科の職能たる美の教育が割合に閑却されて居る傾向がある。岸田氏は「一番大事な點は兒童の心に美しいものを愛する感情を養ふことでなければならぬ」と唱ひてゐる、余も是れに共鳴を持つ一人である。圖畫科に於ては美の教育のための自由教育でなければならぬ、即ち或る種の自由を通じて美の教育の徹底を期すると云ふのでなければならぬと思ふ。



## 第四章 岸田氏の圖畫教育觀

岸田劉生氏は東京銀座岸田吟香翁の遺子、高師附屬の小中學を経て、舊白馬會研究所に學ぶ。大正六年第四回二科會展覽會に「初夏の小路」を出品して二科賞を受く。昨年の帝展には「童女像」を出品した。著書としては、「劉生畫集及藝術觀」「裝幀畫集」等がある。毎年十二月赤坂三會堂で同人の作品展覽會を開く草土社の頭目の地位にあり、又春陽會の客員である。

同氏の圖畫教育に就いての意見は、大正十年六月十八日午後三時より東京高師に於いて講演發表され、その後雜誌「圖畫と手工」「圖畫研究」「教育論叢」等に發表された。

次にその論文の中から、自由畫の批評に關する部分を除き、又同氏の圖畫教育上の提案の部分を除いた他の部分につき、更にその中の重要な點とも見らるべき所を摘出して録することとした。

同氏の三つの提案に就いては、別に此の章に採録して私見を述べることにする。自由畫の批評の部は同氏から「自由畫を誤解した所があったから、其の部に就いては再録を見合せる様に」とのことであるので除いたのである。

### 岸田氏の論文摘録

今までの圖畫教育は手先きの練習が重んぜられて、實用といふことに主力が注がれて居たやうに思はれる。併し圖畫が兒童の精神の基礎を造るものとなれば、今まで考へられて居たよりは、もつと重大な教科になる譯である。私に言はせれば、圖畫は小學校の他の教科目よりも一層重大なものと思はれる。今までの圖畫教育は此精神方面を輕んじ過ぎた傾がある。

一番大事な要點は、兒童の心に美しきものを愛する感情を養ふこととでなければならぬ。自分は教育者でないから深く立入つては言



へないが、今日の教育は感情教育に冷淡であるやうに思はれる。児童には美しい感情を養ふことが最も大切である。美醜が分れば善悪も亦自然と分つて来る。美醜の感じがやがて道德の基礎にもなる。今日の子供は美醜に對する感じが極めて粗野である。詰らない修身教授よりも、良い音楽を聞かせ、良い繪畫を見せる方が、餘程良い効果を擧げ得ることと思ふ。

併し今日の小學校の唱歌などは實に詰らぬもので、児童の美しい感情を養ふことはとても出來ない。それといふのも日本の文明は其傳統を破壊せられて從來の基礎は失はれてしまひ、残つたものはまだ安定しないで外來の摸倣ばかりが行はれて居る状態に在るからである。

學校で児童に見せる掛圖や畫でも、多くは説明圖であつて美的要

素がない。けれども今日の教育家にそれを求めることは少し無理かも知れない。何となれば自分自身さういふ要求を有つて居る人でないから、子供だけにそれを與へると言つても無理だからである。併し無理でも注意はしなければならぬ。

小學校の教育は児童の美的意識を目醒ますことでなければならぬ。中學校でも同様である。若しさうでなければ道德教育も概念的になつてしまふ。今日の美術家が既にくだらぬものである。それが即ち小學教育の結果と謂はねばならぬ。一般の人々に今日よりはもつと美を愛する心があつて欲しい。それがなければ眞の文明ではない。さういふ事は専門家になる爲めにのみ必要なのではない。この感情の洗練があつて初めて公德もよくなる。圖畫教育の大切なことは此點に在るので、是が圖畫教育の先決問題である。



形式の會得は、内なる美を自由に表現さす誘引となる。只形式のみを學ぶからそこに弊害が生じるのだが、例へば、南畫法の米點などはその美表現としての精神をよく理解してその形を知れば、一つの美の表現法として可なり重寶な美術的要素とする事が出来る。これを南畫に限らず、木炭素描にさへも用ひる事は出来ぬとは云へない。要はそれが美を表はす一つの要素として眞に理解され、ばい、譯で、さういふ手法によつて表はされた美の性質をよく直感出来ればいゝのである。

美を現はす法の會得としての臨畫及手法教授は、かくて或る程度迄必要である。「美術」といふものを理解するためには、どうしても美術の精神及形式の傳統を或る程度迄學ぶ方が得策である。

元來、圖畫教育の目的は必ずしも兒童を藝術家に教育する必要はないのであるから、さういふ立場から、何も「美術」の事をさう骨折つて教へる必要はないといふ考が生じるかもしれない。しかし、美術家になるならぬは別として、「美」といふものを知るのには、美としての人類の功蹟に參しなくてはこれを學ぶことは出来ない。即ち傳統によつて鍊へられた蓄積された「美」を他所にして、吾々は單獨に「美」と云ふものを内に生み出し得ない。

美を知るのには、美術を見なくては駄目である。そこには幾十年の「人類の内なる美」が蓄積され、鍊られ鍊へられ、築かれ、精華となつて咲き出でゝゐる。人は一人の力を以て、それを生む事はどうしても出来ないのである。どうしても吾々はこゝに參してその精華にふれなくてはならない。かくて美術に學ぶといふ事は必ずしも美術



家にならなくとも、美を知る上には、自然を見る事よりもむしろ必要と云はる可きである。

かくの如くした上にて、自然を見るならば更に吾々は多くの謎を自然の上に見出し、更に多くの美しさを自然の上に見る事であらう。

見學の方にはまだ具體的方法が考へられてゐない。これは、自分もまだ充分に考へつかぬ事であるが、只見學が必要であるといふ根本の事を今日は提唱して置かうと思ふ。但し、一二の考へを云へば、名畫の複製を、子供に見せる事、美術館につれて行く事、偉大な美術家の傳記逸話を話す事なのである。

この場合問題になるのは、その美術家及び作品の選擇に、教師の美的能力の問題が生じる筈である。しかしこれは、先づ世界的な定評

に従つて、よろしからうと思ふ。今の處なまじつか教師のオリジナルを出されるよりは、その方がましの氣がする。

影響をうけて、自己がなくなると云ふ人の惜しむ「自己」とは、それはまだ自己にならぬ自己で、當然なくなつてしまつていゝ質のものである。又影響をうけたとしてそのうけ方がよければ、決して自己といふものは失はれるものでなく、かへつて、本當にいゝ影響の下にたゞき上げられた自己は、よりその力を發揮し、より強き自己を獲得する事になる。この事實に於て、きつと思ひ當る時があらうと思ふ。まるで一切の美術を見せないで育つた人のものと、よき影響の試練を経て育つた人のものと、どちらに、眞の積極的に生きて自己が表現されてゐるかといふ事は、先づ余の考へが當る事と思つてゐる。(以上)



同氏は其の論文の最初に於て、今までの圖畫教育は手先きの練習が重んぜられて、實用といふことに主力が注がれて居たやうに思はれる。併し圖畫が兒童の精神の基礎を造るものとなれば、今まで考へられて居たよりはもつと、重大な教科になる譯である。私に言はせれば、圖畫は小學校の他の教科目よりも一層重大なものと思はれる。今までの圖畫教育は此の精神方面を輕んじ過ぎた傾がある。と云ふ説は、吾等にとつて、どんなに愉快であり心強さを覺えるであらう。既往の圖畫教育が岸田氏の説の如く輕重が轉倒して居たと云ふことは、第一法令が然らしめたのである。手先きが一寸小器用に動いて、簡單なものゝ形が描けると云ふことは、日常生活の上に便利なことだと云ふ所から、

圖畫を加へて居るのだと考へて見ると、よく法文の意味が解決出来る氣がする。そして、兼ねて美感を養ふである、美感の教育は第二義的な位置にある。一體圖畫科設定の理由は、美感教育の必要からでなければならぬ、然るに美感と云ふことが、兼ねてであつて、軽く取り扱はれて居るのは、奇麗と云ふのはよい事だ、と云つて美感を附け加へたのである。奇麗と美感と一緒にしての美感である。この美感が本當の意味に解されて、誠意を以つて目せられる時、美感は圖畫科中より光彩を放つ時、圖畫科なるものは、躍進して主要な位置を占めるのである。斯の如く法令は、圖畫科に對しての期待が皮相の所にあつたと云ふことが、其の教育をして、兒童の個性や主觀を没却せしめた所以だと思ふ。同氏の精神方面が輕んじられて居たと云つたのは、此の事に外ならぬと思ふ。



前章に於て既に述べた様に人間の精神に反對な兩面があつて、相互に相通じて一體となるべき境地がある、この境地を目指すこそ、全教育の使命であつて、そしてこの境地に達する方法は、何れかその一つを撰んで突進するか、又は兩方面を平均に發展を期して行くかであるが、前者はその途中に於て不便な所があり、危険の様でもある。或は寧ろ行はれ難い様でもある。だから温健な後者を採るべきである。そしてその反對な二つの方面とは、云ふまでもなく、智育と美育である。今の教育が智育に偏して居ることは、何人も認めて居る所である。そしてその反對な兩方面の教育が配置された以上、バランスが取れて居なければならぬ、そこに意義がある。その意義あらしめる教育の半面を擔當する美育の位置は現在どうであらうか——不調和な教育、不安定な教育、淺薄な人間をつくる淺薄な教育が行れてゐたのではないか、今の

世の多くの人は、餘りに理智(利智)にさとく、豊かな感情と隔合されて居ない、淺い自己の理智を振り廻し、事物に概念的な解釋を下して、偏に無難を期してゐる。けれどもそれは淺いものであるために、そこに無形の法則のあることがわからず、自己の無難を期するために、他に害して快とする様にもなる(本當の幸福は、顧みての自己に歡びを持ち、その歡びを感じつゝ、一意働くその過程にあるのではないか。理智の世界、功利の世界を超越した所に、轉覆性危険性を持たない、本當の幸福があるのではないかと思ふ。)此の傾向が單に既往の教育に根ざしてゐるとは速断は出來ないが、教育の力を外にすることも又出來ないであらう、こう考へる時、美育が重要なものとなり、これが高調の必要を觀る時、他の教科目より一層重大なるものと思はれると云ふ同氏の説は、非常な歡びを抱ひて首肯することが出来る。



次に、美醜が分れば善惡も又自然と分つて來ると云ふことであるが、これは一概には云へない。極端な(或は純な)美醜の感は、善惡の念を超越する様に思はれる。併し共に高尚な精神活動であり、又兩者が合致する所に、高尚な域があるとしたならば、これは又どうしても肯定しなければならぬのである。

造形美術が裝飾の本能と模倣の本能との二大要素が合致して、成立すること等に就いては吾等の教へられた所である。

二

同氏の三つの提案に就いては、吾等實際に當る者にとつては、證明臺とも云ふべきで、研究努力をいたす方向がわかる。次にそれを紹介する。

(その一)

美を教へることの二つの解釋である。一つは教師自身が本當に「美」と云ふものを知つて居て、生徒の習作をその美を標準として批評したり、又事々物々に就いて、様々な美の現はれを説明して聞かせたり、古名畫その他について、その教師の感心してゐる所を話して聞かせたりする事、即ち、古來から偉大な藝術家だちが己れに私淑して來る弟子だちを教へたと同じ方法をさして、美を教へると解する事。

もう一つは、教師自身は何も深い「美」について知つてゐるのではないが、或る程度迄美術の事、又、手法その他の傳統について、知つてゐる(それに捉はれてはならないが)よき美術を尊敬し、兒童にその美術を示し、又兒童を自然の美しくしさに接しさせ、兒童の心を美の方へ向けさせ、その「心」に芽生える美の芽生の生育をたすけ、啓發する機會を多



くする事、これ等の方法も、或る見方によれば、美を教へる事であると云ふ事が出来る。

所でこの二つの方法の中、前者は、これを一般に望む事は到底出来ない、それは、最も理想的な方法であるが、それだけに、それは一寸出来ない相談の事である。

しかし第二方法に至つては、必ずしも出来ない事ではない。

圖畫教育の問題は、つまりこの解決に於ける美の教育の方法について研究すれば、それにて盡きる事となるのである。

即ち、児童の心を如何にして、美に向けさせ、美に接しやすく、その方法を究める事が今後の圖畫教育の最も根本的な大切な問題であらうと思ふ。

(その二)

一、自由畫法(自然模寫及想像發露又は裝飾發露)

二、見學法(美術に接しさせ、美術を知らしめる。)

三、臨畫法(形を主とせざる模倣、模寫、但その手本は名畫素描等よし)

四、手法教授(或る繪畫の特殊なる約束等を教へて美の發露の徑程を知らしめ又は會得させ)

以上の四つの中、三、四の臨畫法と手法教授とは、一、二に比べては、主と客位の位置に置くべきである。即ち、臨畫及び手法の教授は、(二)の見學法の一部と見てもさしつかへない、少くもその心持を忘れてはならない。従來の臨畫法がいけなかつたのはこの主客をさかしまにした事に起因する。

(その三)

美術の根本及び起因がこの裝飾の本能又は意志にあるといふこと



は、余のこれ迄しばしば論じた處であつて今それをくわしく述べる事は出來ないが、兎に角本當に美を兒童の心の中に目覺めさせ根本的方法はこの裝飾の本能を刺戟し、善導し、啓發せしめるにあると斷言する事が出来る。

これにくらべては、今迄述べ來たつた模倣法(即ち、自由畫法は自然への模倣、見學法その他は美術への模倣)はずつと根本的なものではなくなる。

元來、美術は裝飾の本能及び模倣の本能の二つが合致した處に起因するが、その中、裝飾の本能は更に根本的で重要なものである。

かくて兒童のこの本能を啓發すべき教育法について考へるのが圖畫教育又は美的教育の最も根本の問題だと云へる。先づ自分はその方法として、次に考を述べやう。

一、物の整頓法

二、物の清潔感の啓發

三、物の形の調和を愛さしめる法

四、以上三つを更に積極的にして物を美的に置かしめる練習

今の處以上の四方法であるが、その中第二の清潔の練習は特にしないで、他の三つをする中にそのつと爲し得る事である。

即ち、美感の起る最も原始的な状態は、物を不潔にしないで、整頓してよからうといふ本能、物の形の不調和に、心の亂れを感じる本能にあると自分は思ふ。

これ等の本能や要求がその消極の境を脱して積極に至る時、すなはち、不調和でないといふのが、更に、より調和的になるといふ事になり、それが更に、目で、何等か心が喜悅なる様な形になるといふ事になり、こゝに裝飾が



生じ、その裝飾の對照又は準據すべき彼岸として美が生じて來たのだと思ふ。

前述の四つの方法はこの過程に則つたものであつて、これによれば兒童の内面にひそむ裝飾の本能、即ち内なる美の芽を誘發し、啓發し、生かす事が出來ると思ふ。

この四つの方法の具體的な考察は余の領土でないから、他の人にゆづるが、余の考へとして積木などを、もつとさう動機から考へて改良したら或は面白からうなども思ふ。その他、色紙を切りぬくにしてもかゝる動機からそれをさせると否とでは、大分その面目がちがつて來やうと思ふ。

しかしこの方面の考案は自信もないから他の人にゆづるとして、今日はこの新しい提案を述べてみて、諸君にも考へていたゞくに止めや

うと思ふ。

以上で大體余の圖畫教育についての考察は述べたと思ふ。(以上)

「その一」は教師の美的方面の修養が充分であると云ふに越した事はなく、或る程度、前者或は前者と後者との間位の程度の美的修養をなさうとするのは、容易な事ではなく、後者の方としても、理論方面の研究を必要とする事は勿論で、當然書物の選擇の問題が起つて來る。従つて語學の素養がなければならぬと云ふ様であれば、又誰れにも一寸とは望まれない事である。(若しそうならば余の如きも、真先きに此の事に落第である、全然資格がない方である)岸田氏の説を實現することは大切には相違ないが、必ずしもそうしたものでなく、實際方面の美に就いての新しい印象が刻まれて働いてゐる状態が大切だと思ふ。



即ち昨日も寫生の筆を把り、今日も又寫生の筆を把らうと考へてゐる。そして今日は如何なる美を、如何にして現はすべきかと云ふことに就いて、時々考へるともなく考へる、と云ふやうな、實際的な美に對する熱心さと、緊張的態度とを必要とする。

その他、モデルに就いて、教師の美の説明も決して等閑に附すべきでなく、そしてその説明は出来るだけ圓滑に行はれたい。殊にモデルの美に就いては、教師自身が感激を持ち、それが説明の上にまで滲み出るやうにしたいものである。けれどもこの説明は、教師の主観として述べ、兒童のために参考として述べる、と云ふ立場からせられたいものである。

「その二」に就いては今の所述べるものを持つて居ない。殊に教育者各自に於て、研究して頂きたいのである。

「その三」は、美の教育をなすと云ふことは、兒童の裝飾本能を啓發することが根本であり、その方法としては、物の整頓感及び清潔感を啓發し、物の形の調和を愛さしめる法に就いて、指導をなすのが順序の様に説いてゐる。此の事を更に解剖的に考へて見ると、美育の根本或は發端は、視覺を通じて知るべき外界の事物現象に就いて、敏感でありデリケートの所のある様に、養ふべきであつて、その對象として、彼等の生活に接近し、彼等の心理を本位としたものが即ち是れではないかと思はれる。

物の形の不調和や不整頓に心の亂れを感ずると云ふことは、非常に良い事だと思ふ。それが高尚な精神の一部であり前身であると云ふ氣がする。けれどもこゝに考ふべきは、整頓と調和とは必ずしも一致しないことである。不整頓の中に調和があり、そしてその調和より受



ける美は、整頓より受ける美よりも優つてもゐるものであり、或は優つてゐることがあると思ふ。けれど指導法の徑段として、整頓の美より這入ると云ふことは矢張り否定しがたいことだと思ふ。

三

岸田氏の論ずる所、殆ど普遍妥當性が横つてゐることはたしかなことだと思ふ。

その提唱の世間への浸潤の程度に、評價の標準を置き或は宣傳力の普及さを見て、驚愕したり奮慨してばかり居て、岸田氏のこの提唱の出現を歡び且つその精神を我が圖畫教育の上に、移すことに開眼がない様であつたら、折角、多少活氣づいて來たやうな圖畫教育も、空しく、から噪ぎに終つて、遠からず再び、荒涼落莫の昔に還へるのではないかと心

配される。

山本氏の説が、透徹さを缺けるが如き所あるにも拘はらず、一方には大いに歓迎せられる所となつたが、岸田氏の此説はなせもう少し世の中に浸潤しないのであらうか。

岸田氏のこの所説には、非常な真理と、非常な尊さとを存して居ることを、自分は信ずるものである。

次のことは、この章に限つて述べる性質のものではないが、今氣附いたまゝにこゝに述べることにする。

それは世の父兄や、教育者その人達から、繪は下手でもよい、或は描けなくともよい、畫家にするのではないからといふこと、又は、世の中の人



が皆畫家ばかりになつては困ると云ふのを聽くことがある。これは俗論だと思つてゐる。論として成立しないものであり、且つ不純な感情を挾んでゐるものであると思つてゐる。

かゝる言葉を耳にすることは、熱心な圖畫の教育者にとつて不愉快に感ずる所である。

先づ前者の「繪は下手でもよい、或は描けなくともよい、畫家にするのではないから」と云ふのについて、感ずる所を述べて見ると、所謂繪が描けること、上手であることは、その兒童の將來は畫道に就き、畫家にならねばならぬと云ふ規則もなければ、又そう云ふ規則が成立する譯のものではない。

又所謂繪が描けること上手であることは、決して一定の程度標準を指して居るのではなく、又指すことの出來ないものである。

即ち比較的であつて、上手であり描けるものゝ中に又澤山な差がある。

畫家たらんとし畫道に就かうとする場合は次の様だと思はれる。

一、特に繪畫に就いての才能に長じ、自己も畫家たらんとする氣はあり、殊に外部が畫家たらしめんと努める場合。

二、特に繪畫に就いての才能に長じ、畫家たらんとして、自己に熱烈な絶對的な内部發動があつて、自己が自己の意志を貫徹するに適せる境遇を作り出す場合。

そして一よりも二が重きをなすものだと思ふ……。

又繪が描けること、上手であることは、繪が美感の働きの上に成立するものであるとしたならば、美感は精神活動の高尙なるものとすることが出來やう。この高尙なる精神を具有することは、人格的であつて、



これを希求するところに人間性が存するのではないか。

繪が上手であり描けると云ふことは、あつてよいことであり、或はあ  
る方がよいのではないか。

次に、皆畫家になつては困ると云ふことに就いて述べる。いくら畫  
家になるやうに努力しても、決して皆畫家にはならないのである。美  
術學校の卒業生の中にさへ、途中で脱線して、畫家にならないものが隨  
分あるそうである。

それはさもあるべきことで、比較上のことであり、適者生存であるか  
らである。

又如何に圖畫教育を熱心に行ふからとて、級の大部分から畫家を出  
すと云ふ様なことはなく、あつても困らないのであるが、所がない。二  
三名も出れば關の山であつて、かゝる級は洵に少なく従つて名譽のこ

とである。

いくら熱心だと云つても、それ等の教師の態度がそれ／＼違ひ、又そ  
の級を組成して居る兒童の實質がそれ／＼異つて、その教育的効果に  
差があるものである。

それで教育者が皆熱心に圖畫教育を行ひ又美術教育、藝術教育を行  
ふと云つても一級から一人の畫家も出ないのが普通で又それが永遠  
に續くべきでなければならぬ。

然るに世の父兄又は教育者にして、前述の如き言をなすと云ふこと  
は、この教育に就いて共鳴理解のない淺薄さを語るものであり、或は他  
人の或る教育的權威に對して、どうも面白からずと云ふ變形の言葉で  
はないかと思ふ。

圖畫教育に携はる者に對して一言する。



圖畫教育の精神動機は、決して幾人かの畫家とならうとするものをつくらうとするのではなくて、級全體に對して美育をなさうとするのでなければならぬ、その能率を擧げんとするのでなければならぬことは勿論である。そこに一層大なる名譽が伴ふことだと思ふ。

よし名譽がなくともそれが教育者として眞の態度であると云ふことに歡びを持つて貰ひたいのである。

## 第五章 結 論

### 一

頭をめぐらして、既往の圖畫教育を顧るに、圖畫科本來の特色性質は、空しく没却せられて、その光彩を放ち得なかつた所以のものは、智的教科に類する取扱ひをされて居たと云ふことである。そして、一般に平氣で此の傾向状態を持續してゐたと云ふことである。なんと云つても、法令がその基調をなして居たことは争はれぬ事實である。

現今の如く、その當務者の圖畫科に對する見解が進んで來た時代に於ては、法文になんと書かれてあつても、古いものとして、餘りあてにも



しない様になり、又は法文に訂正を加へて、新解釋を試みて居るものもある。過日、大阪市教育部の請求によつて、同市の圖畫教育研究會では、此の法文に訂正を加へ、更に内容の説明をも附した答申案が出来たことが、大阪毎日新聞に載つて居た。

こんなふうになつて來ると、法令以上に進んで、その先きの境地を開拓してゐると云ふことに、興味と活氣を得て、教育の事に従ふ有様で、法文が古いと云ふことが、却つて意義を持つやうにも考へられるが、併し一般の能率上より見て、又第二の時代の充實さより見て、法令の原文の上に改正を見ると云ふことは、當局が圖畫科に一の光彩を認め、圖畫科に對して異つた意味を持ち、期待する所の多きを表明すると云ふことは、どんな影響を與へることであらう。余は此の際、此の機を逸せずして、當局に於て一英斷あらんことを希望して止まないものである。

現今の様な形勢になつて來ては、教育科の先生達も圖畫科の要旨の解釋の上に、敷衍事項の内容に、一變化を見たことであらう。云ふまでもなく、敷衍事項の中には、現在の圖畫教育對社會の事が力説される事であらう。そして、かゝる講義を聽かされる生徒達も、他より報導機關によつて、又此の事を知つてゐるであらう。そうして若い教育者の胸奥には、法令の原文を超越した圖畫科の目的は樹立されることであらう。

けれども此の事は、一二年此のかたの事である。それ以前はどうであつたか。法文そのまゝの解釋を試みて居たことであらう。そしてそれが思想の根底をなしてゐたことであらう。そして法文なるものが、客觀性を認容してゐる傾向が可成りに強度であつた事が、圖畫科が智的教科に類した取扱ひを受けて居た一因であらう。



他の一因とも云ふべきは普通教育に於ては、智的學科が重要視され、又大部分を占めてゐる。技能科(圖畫科)の如きは、從屬的に置かれてゐる。そして小學校に於ては、是等兩方面の學科を同一の教師が擔當してゐる。そして智的本位の念を以て、或は智的教育の習慣を以つて、此の圖畫教育にも當り、圖畫教育の對象の中に智的方面と全然異り、時に智的方面が邪魔さへする獨特な點が無視され埋没せられて居た所に存する。

そしてそれが官僚的な、外形的な、規範的な指導法が行はれて居た所以である。

圖畫科の中の獨特な點とは何ぞ、それは開放の搖籃の中に兒童の主觀の活動を期さねばならぬと云ふことである。無論開放そのものが目的ではなく、主觀の活動に即する開放であり、主觀の活動の圓滿を期

するため開放である。

又更に主觀の活動を期待する所以は、美意識の活動であり、又美意識の活動の發端は、獨り主觀の活動を期待する所に存する。

主觀の活動と美意識の活動とは相互に融合して一體となるべきものであり、其渾一體こそ、その渾一體の生長こそ、吾等の目指す所である。そしてその渾一體の生成進展を期すると云ふことは、取りも直さず、兒童にとつては、心を専らにして對象を凝視する態度でなければならぬ。余はこゝに於て、兒童に凝視の態度を養ふことの必要なことを高唱するものである。

從來の指導法は、却つてこの凝視の態度を傷け勝ちであつた。こゝろ描いたら先生はなんと云ふだらう。訂正をさせられるのかも知れない、此の努力は無になるのかも知れない、——過激の語調での忠告は受



けたくない、などと恐怖の念に襲はれつゝ、描寫の事に従ふ。或は依頼心を持たせる。それは時々教師の手によつて訂正が行はれるからである。又兒童としては直觀を基礎として、描寫してゐるのに、教師は透視畫法の説明をなしつゝ、訂正を勤めると云ふ様な事が兒童に、寫生とは直觀を描くのではないのか、よく觀てもつまらない。」と云ふ様な觀念を抱かせてゐたのではないか。

かくの如くして、專念なる疑視の態度を取るとを許されなかつたのである。かゝる疑視の態度を養ふ一方案として、藤岡龜三郎氏著、兒童の圖畫の中に自由畫指導法として掲載してあつたものを紹介しやう。「汝のかいた所と思ふ所と一致してゐるか」と云ふ問を發することは、それが最も大切な指導法の一である。そして教師は常に被教育者のよき友でありたい。

凡べて繪畫は自然と自己との交渉によりて成立するものであるから、縦ひ指導者でも其の中間に入つて妨となるやうなことがあつてはならぬ。而して最もよき媒介者でなければならぬ。且つその媒介者は一つも強いる事があつてはならぬ。只補佐するものであるこの補佐と云ふ事が大切な事である。

「彼と是とを比較して見よ、又は、もつと委しく」と云ふやうに反省をうながすことも常に必要ある指導の言葉である。又往々、小供は、「こゝはどうかきますか」と質問することがある。これに對しては、「おまへにはどう見えるか」と先づ反問することを忘れてはならぬ。——「そ

う思つたらそう試みなさい」と力づけてやるがよい。往々被教育者同志の互評をさせるがよい。これは本人ばかりでなく互に効果がある。つまり互に反省しあひ、其の主觀の表現法が上



手になる。其の主観も高まる。但し其のために模倣に陥せてはならぬ。

表現法に關する批評、これは豫め教へると云ふよりは批評により又なるべく作者自身で發見させたいものである。

成績品に對しては彼等は常に批評を待つて居るものである。故に其の發達の程度に應じ、適當に讚辭を與へべきである。故に繪をかく時に誰れでもよくある事だが、製作の途中に見られることを厭ふ事がある。これは事情により最後まで見ぬともよろしい。

と云ふのである。又美意識の活動する場合は寫生上に就いてであるが、構圖の上に、色彩の觀察表現の上に見ることは勿論である。けれど、殊に重要なものは次の二つだと考へてゐる。そして是等は相互に

離れべきものでないことは、云ふまでもない。

一、消略法を行ひつゝ是れを表現せんとする過程。

二、立體感遠近の感物の硬柔の感をも含むを感じつゝ是れを表現せんとする過程。

一に就いては直に明決な又は強烈な印象を探り、或は印象に入れるべき部分の選擇が行はれ、二に就いては自然の啓示してゐる濃淡の妙に感激を覺える所にある。所謂鑑賞もこの美意識の活動に外ならず。又美意識の活動が知性に滲透する所、そこに創造の實成を見る。

## 二

こゝに於て圖書教育の目的と、教育實際家との關係に就いて、一言したいと思ふ、非常に錯綜してゐる所があつて、予としてはその意のある